「女たちの開城記」

～愛に満ちるとき～

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

瀧山（おたき）……大奥筆頭御年寄
染嶋（おけい）……瀧山付中臈、瀧山の叔母
村瀬……瀧山付中臈
仲野（おきぬ）……瀧山付部屋子
梅原（おうめ）……瀧山付部屋子、呉服屋の娘
天璋院（篤姫）……十三代将軍正室
幾島……天璋院付御年寄
ませ……天璋院付中臈、瀧山の姪
静寛院（和宮）……十四代将軍正室
土御門藤子……静寛院付女官
本寿院……十三代将軍生母
法好院……上臈御年寄
実成院……十四代将軍生母
藤野……実成院付御年寄
豊倹院（お志賀）……十三代将軍側室
鶴岡（おみね）……大奥御客会釈
波路……大奥御年寄
常盤……大奥表使
竹川……大奥御祐筆
おゆう……大奥呉服の間

徳川　慶喜……十五代将軍
勝安房守麟太郎……軍艦奉行
尾田若狭守克敏……老中筆頭
青山　松之丞……大奥御留守居役
浅田　宗伯……御典医
光　庵……寛永寺住職
弥平　次……常盤の密偵
西郷　吉之助……薩長軍総裁、薩摩藩士
海江田　信義……西郷の右腕、薩摩藩士
橋本　実梁……東海道先鋒総督兼鎮撫使
守田　勘弥……歌舞伎『守田座』座長
市村　富十郎……歌舞伎『守田座』看板役者
建右衛門……梅原の父、呉服『富橋屋』店主
お　つ……梅原の母、呉服『富橋屋』女将
あ　八……呉服『富橋屋』手代
喜　助……呉服『富橋屋』丁稚
五　夫……両替処『和泉屋』店主
龍　三……瓦版売り
権太
正　吉……大工の棟梁
お　と……正吉の女房
さ
長兵衛……大工見習い、鶴岡の元夫
お　る……長兵衛と鶴岡の娘
は

源太……おゆうの兄
清六……源太の隣人
おく……清六の女房
与作……魚屋

N「江戸幕府が開府されて二百六十年余りの歳月が流れた慶応三年。時の十五代将軍・徳川慶喜は、政権を朝廷に返上。世に言う大政奉還を行った。が、倒幕派は武力討幕を主張。これが翌、慶応四年正月三日に始まった『鳥羽・伏見の戦い』である。幕府軍は敗れ、慶喜は僅かな家来を引き連れて大坂城を脱出。海路で江戸に帰還した慶喜であったが、薩摩・長州を中心とした軍勢は慶喜に対して追討令を発し、慶喜は朝廷から敵とみなされ朝敵となってしまった。薩長軍が、江戸に向けての進軍態勢を整えていたこの状況下は、江戸が合戦の場となり、江戸の街が火の海となることは目に見えており、江戸の人々は騒然。また、江戸城内で将軍に仕える者たちも同様であった。江戸城本丸御殿は、“表”“中奥”“大奥”の三つに区分され、儀式や執務を行う“表”、将軍が政を司るほか日常生活を送る“中奥”と違い、“大奥”は将軍以外は

絶対の男子禁制、女の園であった。慶喜の正室・美賀子は、一度も大奥に入ることがなかったため、大奥においては、今や主不在となっていた。表の動きによって江戸城が危機となっていることで、大奥における混乱も避けられなかった。大奥に仕える女たちは千人とも言われ、その女たちを束ねているのが、御年寄の役についている者である。当時、御年寄の職を預かっていた者は数名いたが、その中でも筆頭御年寄が一番位の高い立場であり、表の老中に匹敵するほどの発言力と影響力を持っていた。当然、権力争いは日常茶飯事であり、幕府動乱のこのご時世においても、それは変わらぬ光景であった。また、大奥は将軍の生母や正室、お手付きとなった側室の生活の場でもあったため、権力争いとは別に、嫁姑争いも顕著に表れていた。妬みや嫉み、企みといった、様々な感情が大奥では渦を巻き、それは大小問わず様々であった。が、

その大奥が、まもなく終焉を迎えようなど、この時は誰も知る由がなかった。大奥を束ねる一人の女を除いては……」

○江戸城・大奥・廊下

十三代将軍生母・本寿院が、苛立っているように小走りで歩いている――その後を慌てて追っている上臈御年寄・法好院。

法好院「本寿院様ッ……お待ちくださいませ。本寿院様……」

○同・同・瀧山の部屋

中臈・染嶋と村瀬、部屋子・仲野と梅原が控えている――足音と法好院の声が聞こえ、一同様子を伺う。そこへ、本寿院と法好院が入ってくる。

本寿院「瀧山は何処じゃッ」

染嶋「瀧山様は、ただいま表へ出向いております」

法好院「本寿院様、瀧山様がお戻りになられてからでよろしいではありませぬか」
本寿院「おめおめと待っておられるかッ。慶喜が逃げ帰り朝敵となった今、この大奥はおろか江戸城はどうなる？　我らとて、覚悟を決めねばならぬではないか」
村瀬「本寿院様。全ては瀧山様にお任せくださいませ。瀧山様は、この大奥を束ねる筆頭御年寄。お考えもおありでしょう。どうかここは、一度お気持ちを静めあそばして……」
本寿院「……」
法好院「本寿院様……」
本寿院「瀧山に伝えよ。一刻の猶予もならぬとな」
と、いそいそと出ていく。後を追っていく法好院――三つ指をついて見送る染嶋、村瀬、仲野、梅原。
仲野「瀧山様の心中もお察しいただければ良いのに。相変わらず本寿院様と来たら……」

梅原「仲野殿……（とたしなめる）」
仲野「私や悔しいのです。瀧山様が、今どのようなお気持ちでおられるか……」
村瀬「一理あるやもしれぬが……」
染嶋「ほんに、おいたわしいことじゃ……」

○同・表・御広座敷

大奥筆頭御年寄・瀧山、老中・尾田若狭守克敏、大奥御留守居役・青山松之丞、軍艦奉行・勝安房守麟太郎が密談をしている。

瀧山「では、薩長軍が江戸に……」
尾田「そのようなこと……何としても避けねばならぬ」
青山「しかし、どのように……」
勝「……」
瀧山「勝殿、何か名案はないのですか？」
勝「薩長軍と話す場を設けねばなりませぬ。このまま事が進んでしまえば、江戸城や江戸の街が、火の海と化すことは必定」

瀧山「火の海だけでは済まぬ。大奥には千人のおなごがいる。軍勢が責めてきたとき、どのようなことが起こるか、口で申すも憚られる……」

青山「既に、大奥からは逃げ出した者が幾人もいると聞き及びまする」

尾田「もはや混乱は避けられぬ……」

瀧山「上様も何をお考えか……。僅かな家臣と大坂から逃げ帰るなど、あまりに身勝手」

勝「それは違いますぞ。上様は薩長軍や朝廷に対して、恭順の意を表しているのです」

瀧山「その恭順が、吉と出るか、凶と出るか……」

青山「おそらく江戸市中においても、この話で騒然となっていることでございましょう」

○江戸の街・道の一角

瓦版売り・龍三が、瓦版の内容を読み上げている――町人の群れができあが

っている。

龍三「一体将軍様は何をお考えか。朝敵となった今、薩長の侍衆が責めてくるのは明々白々。これから江戸の街がどうなるか、これを読まなきゃ分からんよ。さあ、買った買ったッ」

町人たちが、次々に瓦版を買っていく。

○大工正吉の家・一室

正吉の女房・おさとが、険しい顔で瓦版を読んでいる――と、奥から咳き込む音が聞こえ、それに気づくおさと。

○同・厨

少女・おはるが、薪入れをしながら咳き込んでいる――おさとが来ると、

おさと「おはるちゃん。良いんだよ、それは私がやるから」

おはる「私、おばちゃんを手伝いたくて」

おさと「良い子だね、おはるちゃんは。そろ

そろお父さんたち帰ってくる頃だ。一緒に
支度しようかね」
おはる「うん」
と、玄関から正吉の声がする。
正吉の声「けえったぞッ」
おさと「ほら帰ってきた」
と、出ていくおさととおはる。

○同・玄関
大工の正吉、見習いの長兵衛が帰って
いる――おさととおはるが出てくる。
おさと「お帰んなさい」
長兵衛「おはるがいつもすいません」
おさと「何だい、毎日同じことばかり言って。
私たちには子どもがいないだろ。だから、
おはるちゃんが娘みたいに可愛いんだよ」
正吉「何が娘だい、孫だろうよ」
おさと「あら、私は本当に娘だと思ってるん
だから」
正吉「だったら長兵衛はどうなるんだよ。長

兵衛が息子だったら、おはるは孫じゃねえか」

おさと「それもそうね」

長兵衛「女将さん。今、江戸市中が何やら騒がしいみたいですけど」

おさと「瓦版だろ。私も見たよ」

正吉「馬鹿野郎、何が火の海だい」

おさと「お前さん」

正吉「侍ってえのは、俺たち大工が拵えた屋敷がないと雨露も凌げねえんだよ。それなのに、偉そうに踏ん反り返りやがって。侍がそんなに偉えのかよ。刀や銃なんかで怯えてたら、江戸っ子大工の名が廃るんだよ」

おさと「そんなの言ったところで、お前さん一人でどうなるものでもないだろ。いい加減におしよ、もう……」

不機嫌な顔の正吉――不思議そうに正吉を見るおはる。

○江戸城・大奥・波路の部屋

御年寄・波路が煙管で煙草を吸っている――表使・常盤が報告に来ている。

波路「瀧山様が表に？」

常盤「はい。御老中の尾田様、大奥御留守居役の青山様、軍艦奉行の勝様と、何やらお話のご様子にて」

波路「勝殿もご一緒であったか……何やら不安な動きと見た」

常盤「私も、そう察しておりまする」

波路「瀧山様が筆頭におられるのも、時間の問題であろう」

常盤「では……」

波路「皆まで言うな。常盤、瀧山様から目を離すでないぞ」

常盤「はい」

波路「そなたは今や表使じゃが、私の力があれば御年寄に取り立てることもできる」

常盤「私が御年寄……」

波路「そなたも御年寄になれば、この大奥は私とそなたのものじゃ」

常盤「波路様……」
波路「慌てるでないぞ。抜かりなく、瀧山様の弱みを握るのじゃ」
常盤「かしこまりましてございます」
と、三つ指をついて平伏スル――不気味な笑みを浮かべる波路。

○同・表・御広座敷
勝と瀧山が待っている――襖が開き、十三代将軍正室・天璋院と十四代将軍正室・静寛院が入ってくる。平伏して迎える勝と瀧山。
勝「天璋院様、静寛院様におかれましては、ご機嫌麗しく……」
天璋院「（遮って）挨拶はよい」
勝「……」
瀧山「……」
天璋院「勝。私共を呼んだのは、慶喜公のことで、何か動きがあったのではないか？」
静寛院「……」

勝「薩長軍が、江戸総攻撃の支度を始めた由
にございます」
天璋院「江戸……総攻撃……」
静寛院「戦になるということですか？」
勝「それだけは避けねばならぬと、先刻より
瀧山殿と話し合っておるのですが、これば
かりは天璋院様と静寛院様のお力添えを
賜りたく存じます」
天璋院「私たちの……」
静寛院「……」
勝「薩長の陣頭を指揮するのは、薩摩の西郷
吉之助。天璋院様も、よく存じ上げている
者かと」
天璋院「西郷が、そのようなことを……」
勝「また朝廷側には、東征大総督として有栖
川宮熾仁親王がおられます」
静寛院「熾仁さんが……」
天璋院「まさか……」
勝「静寛院様の、かつての許婚のお方です」
天璋院「そのような……」

瀧山「……」
天璋院「我らで止めることができるのなら、どのようなことでも致す」
静寛院「私も……」
勝「何卒……何卒ッ……（と平伏する）」
天璋院「瀧山」
瀧山「はい」
天璋院「大奥のおなごたちは、如何するつもりじゃ？」
瀧山「薩長の軍勢は、どのようなことをしてくるか分かりませぬ。命に代えても、私が大奥を守りまする」
天璋院「相手が薩摩であろうが長州であろうが、私も徳川の人間となった御身なれば、断じて戦を避け、何とか我らの手で留めねばならぬ……」
瀧山「勝殿。薩長の動向が分かり次第、天璋院様や静寛院様に、お伝えのほどを」
勝「承知いたしました」
険しい顔の天璋院。

○歌舞伎『守田座』・表

のぼり旗が立てられている。

○同・舞台

歌舞伎役者・市村富十郎が、演目を披露している――観客席の二階から、御高祖頭巾を被った村瀬が、富十郎を見ている。一階席からは「成田屋！」と大向こうが聞こえる。

○同・楽屋

富十郎が化粧を落としている――座長・守田勘彌が入ってくる。

守田「おい、ちょっと良いか」

富十郎「何ですか、座元」

守田「今日も、大奥の村瀬様がお見えだ」

富十郎「……」

守田「おめえのために言うんだ。危ねえ橋渡るのは、やめるんだ」

富十郎「……」
守田「縁は早いうちに切ったほうが良い。もし何かあったときは、俺やお前だけじゃねえ。村瀬様も、ただでは済まねえんだぞ」
富十郎「村瀬様は、俺の客です。何をしようが俺の勝手です」
と、出ていく――呆れるように見送る守田。

○茶屋の一室
村瀬と富十郎が激しく抱き立っている。
村瀬「富十郎……」
富十郎「村瀬様……」
村瀬「一緒に、逃げてはくれまいか」
富十郎「何を仰せられまする。村瀬様は大奥御中臈。歌舞伎役者の私と逃げるような真似をしたら、どのようなことになるか……」
村瀬「だから逃げたいの。誰も知らない、どこか遠くへ……ね、お願い富十郎」
富十郎「村瀬様……」

動揺している富十郎。

○江戸城・大奥・静寛院の部屋

静寛院が書をしたためている――控えている女官・土御門藤子、ほか女中たち。と、どこからか琴や鼓の音色が聞こえてくる。手を止め、訝しそうな顔になる静寛院。

静寛院「何の音や？」

藤子「また実成院様でございましょう。昼日中から、また宴をされておいでや」

静寛院、筆を置くと立ち上がる。

○同・同・実成院の部屋

十四代将軍生母・実成院が酒を飲みながら騒いでいる――女中たちが琴や鼓の音色に合わせて舞っている。

実成院、酒を飲み干すと、側に控える御年寄・藤野に器を差し出す。藤野、ためらないながらも黙って酒を注ぎ足

す。と、そこへ、藤子を従えた静寛院が入ってくる。琴と鼓の音色が突然止まる。

実成院「続けよ！」

静寛院「母君。昼間からのお酒は慎まれませ。お身体に悪うございます」

実成院「そなたに言われる筋合いはない」

静寛院「母君……」

実成院「酒は、言わば薬じゃ。薬を飲んで何が悪い」

静寛院「(藤野に)そなたがついていながら、何としたことか」

藤野「申し訳ございませぬ」

実成院「謝ることなどないわ」

静寛院「家茂さんが亡くなられて寂しい思いをしているのは私も同じ。しかしそれを酒で逃げていては、家茂さんが見たら、さぞお嘆きにならしゃいますやろ」

実成院「そなた、嫁の分際でこの私に文句を言うとは……偉くなったものよ。やはり、

天皇皇女は言葉が違いますな」
藤子「（ムッとして）何を言わしゃりますッ」
静寛院「藤子……（と止める）」
藤子「しかし……」
静寛院「今は、徳川家とこのお城を守らないかんときです。母君も、お覚悟をお持ちくださいませ」
と、頭を下げる――面白くない顔の実成院。

○同・同・天璋院の部屋
天璋院、御年寄・幾島、中臈・ませ、他の女中たちが深刻そうに話している。
幾島「しかし、よりにもよって西郷殿が……」
ませ「薩摩と言えば天璋院様の故郷。同郷同士で敵となるなど、このようなお辛いことがありましょうや」
天璋院様「勝の話では、江戸総攻撃に向けて動いているとか」
ませ「では、この大奥に薩長の侍どもが……」

不安そうにざわつき始める女中たち。
幾島「静まらぬかッ……。（と怒鳴ると）そうならぬように、天璋院様は総攻撃中止の嘆願をされるのじゃ」
天璋院「今はとにかく、西郷を止めねば……」
と、足音が聞こえる――不機嫌そうに本寿院が入ってくる。後に続く法好院。
本寿院「（睨んで）……」
天璋院「母上様、如何されました？」
本寿院「如何も何もないものじゃ。薩長の侍共が武力をもって江戸を責める支度をしているというではないか。しかも指揮を執るのは、薩摩の者とか。天璋院殿、同じ薩摩の者として、よもや薩長に加勢するわけではあるまいな？」
幾島「本寿院様、何をおっしゃられます……」
本寿院「私は天璋院殿に聞いておるッ」
幾島「……」
天璋院「確かに私は、元は薩摩島津家の出。養父・島津斉彬公より、亡き家定公に将軍

継嗣において一橋慶喜公を推挙するよう密命を受け、この徳川に嫁いでまいりました。島津家、いえ薩摩の間者と思われても致し方のないこと。されど、家定公の御台所となって、私は徳川の人間として生きることを選びました。今になって、薩摩の肩を持つなど、考えにも及びませぬ」

本寿院「口では何とでも言える。いかなる立場であれ、薩摩から嫁いで来た身に変わりはない。徳川に嫁いだと言うのであれば、姿で見せていただかなくては。天璋院殿に、薩摩への想いが無いと申されるのであれば」

天璋院、じっと本寿院を見つめる――

本寿院、天璋院を見下すように睨むと、そそくさと去っていく。法好院、平伏すると、慌てて本寿院の後を追っていく。

法好院「本寿院さま……」

幾島、立ち上がって、本寿院たちの姿

を確認すると、険しい顔になる。

天璋院「……」

幾島、天璋院の前に着座すると、

幾島「天璋院さま、本寿院様の言われよう、あまりと言えばあまりではございませぬか。幾島、口惜しゅうございます……」

天璋院「言わせたい時に言わせておくのが良い。母上様も、気が立っておられるのじゃ。当たりたくても当たり散らす先が無い故、その矛先が私に向いただけのこと」

ませ「薩摩へは、どのように……」

天璋院「嘆願書じゃ。まずは、薩長軍に我らの気持ちを分かってもらわねばならぬ」

○同・同・長局の一室（夜）

村瀬が書をしたためている――その顔は何かを覚悟した様子である。

○同・同・廊下（翌朝）

仲野が血相を変えて走っている。

○同・同・瀧山の部屋

瀧山が着替えをしている――手伝う染嶋と梅原。仲野が駆け込んでくる。

仲野「大変でございますッ……」

瀧山「如何した？」

仲野「村瀬様が……村瀬様が……」

○同・同・廊下

瀧山が走っている――後に続く染嶋、仲野、梅原。

○同・同・長局の一室

女中たちが野次馬になり、中の様子を見ている――瀧山たちがやってくると、一同慌てて平伏する。

瀧山、中を見ると、唖然となる――短刀で胸を一突きにした村瀬が倒れている。

瀧山「村瀬ッ……。（と駆け寄ると）村瀬、

何故このような……」

と、波路と常盤がやってくる。

常盤「瀧山様、これはいかなる所業でございますか」

瀧山「……」

波路「お付きの中臈の命一つ救えぬとは、筆頭御年寄の名にも傷がつきまするな」

瀧山「……」

波路「この際、御年寄の職を辞されては如何でございましょうか？　今、幕府動乱の折、大奥もの命懸けにならねばならぬ時に、このような失態。大奥筆頭御年寄が務まる道理がございましょうか」

常盤「いかにも」

瀧山「……」

波路「さ、村瀬の亡骸は早々に処分いただきますように」

と、嫌味な笑みを浮かべて去っていく

――後に続く常盤。

恨めしそうにその姿を見送る染嶋、仲

野、梅原。

瀧山「皆、下がりゃ。すまぬが、一人にしてくれぬか」

一同、無言で平伏すると、去っていく。

染嶋、野次馬の女中たちを促していく。

瀧山、ただひたすらに村瀬の死に顔を見つめている。

○同・同・波路の部屋

波路と常盤が話している。

常盤「思いがけぬことが起こりましたな」

波路「こちらにとっては好都合じゃ。しかし、これでは生温いわ」

常盤「次は、如何様に？」

と、女の声がする。

女の声「おゆうにございます」

波路「入れ」

と、呉服の間・おゆうが入ってくる。

常盤「この者は？」

波路「呉服の間のおゆうじゃ。普段は、瀧山

様の懐取を仕立てておる」
おゆう「私に、頼みとは？」
波路「確か先刻、そなた瀧山様の懐取を新たに仕立てておったな」
おゆう「はい」
波路「瀧山様の元にお届けに行く際、襟元にこれを仕込んでほしいのじゃ」
と、懐から折りたたまれた懐紙を取り出し、おゆうに渡す。おゆう、懐紙を広げる――街針が入っている。
おゆう「これを……でございますか」
波路「ただの街針じゃ」
おゆう「……」
常盤「できぬと申すのか？」
波路「私についてこれば良い。上様不在の今じゃが、そなたを御中臈に取り立ててしんぜよう。そなた、病気の兄がいるのであろう。治療のための金子は、いくらでも弾むぞ」
おゆう「波路様……」

波路「どうじゃ？　兄のためであろう」
おゆう「かしこまりました」
波路「それで良い」
　と、天井から男の声がする。
男の声「弥平次にございます」
常盤「如何した？」
　と、天井を見る――天井の一部が外れ、常盤の密偵・弥平次が顔を出す。驚くおゆう。
常盤「案ずるな。私の密偵、弥平次じゃ」
　思わず平伏するおゆう。
弥平次「急ぎ申し上げたき儀あり」
波路「構わず申すが良い」
弥平次「瀧山様においては、奥医師の浅田宗伯殿と、御客応答の鶴岡殿と、何やらお話のご様子で」
常盤「宗伯殿と鶴岡様……」
波路「どういうことじゃ？」
常盤「弥平次、直ちに調べてまいれ」
弥平次「御意」

と、天井を戻し、去っていく。

○同・同・瀧山の部屋

瀧山、奥医師・浅田宗伯、御客応答・鶴岡が話している。

鶴岡「宗伯殿、それは誠でございますか？」

宗伯「いかにも。診立てでは、一度や二度ではございませぬ故」

鶴岡「しかし、上様のお渡りがないどころか、お手付きのご側室でもない村瀬殿が、いかにして懐妊など……。身ごもるということは、相手がいるということ……」

瀧山「私宛ての遺書には、このように書かれておったわ」

と、村瀬の遺書を鶴岡に渡す。

鶴岡「（遺書を見て）守田座の、市村富十郎……。歌舞伎役者と密通していたのでございますか……」

瀧山「城を出ることはあったのじゃが、まさか歌舞伎役者と会うていたとは……」

宗伯「口外せぬよう強く言われておりました故、瀧山様にもお伝えできず……申し訳ございませぬ」

瀧山「宗伯殿が謝ることではない。全ては、この瀧山の落ち度じゃ」

鶴岡「して、市村富十郎の処分は如何様に？これは大罪でございますれば」

瀧山「富十郎殿や守田座には、何のお咎めもしないつもりじゃ」

鶴岡「お咎めなし……でございますか」

瀧山「生きて償っていただこうと思う。村瀬と、お腹の子の分まで」

鶴岡「……」

瀧山「鶴岡、そなた私の名代として、守田座に出向き、村瀬のことを富十郎にお伝えしてほしいのじゃ」

鶴岡「承知致しました」

平伏する鶴岡。

○長屋・表

井戸の水で野菜を洗うおくに――魚屋
与作が、魚を運んでくる。
与作「おはようございます、おくにさん」
おくに「あら与作さん、おはよう」
与作「今日は活きの良い鯛が揃ってるよ。（と
鯛を見せて）さあ、どうかね」
おくに「まあ、これは活きが良い。けど、特
にめでたいことなんてないんだよ。この間、
瓦版見たけど、何だか江戸の街も物騒にな
りそうって言うじゃないか」
与作「薩長のお侍さんの話だろ。江戸を火の
海にするなんて、田舎侍のすることは分か
んねえや」
おくに「ほんとだね。うちの人もね、瓦版に
踊らされるなって言うんだけど、やっぱり
武力で来られたら、誰だって怖いだろう」
与作「なるようにしか、ならねえか」
難しい顔のおくに。

〇同・清六の部屋

おくにの夫・清六が、傘貼りをしている――おくにが戻ってくる。

清六「野菜洗うのに、どれだけかかってるんだよ」

おくに「酒屋の与平さんとちょっと話してたんだよ。活きの良い鯛があったけど、やめた。うちには、とてもそんな余裕ないから」

清六「当たりめえよ。鯛一匹買うのに、傘何本売らなきゃいけねえと思ってるんだよ」

おくに「いつまでこんな生活が続くんだろうねぇ。薩長の侍だって、いつ江戸を襲ってくるか分かんないのにさ」

清六「またその話かよ、いい加減にしろよな」

おくに「街中、その話で持ち切りだよ。公方様のいらっしゃるお城あって、どうなるか。隣のおゆうちゃんだって、お城勤めしてるじゃないか。私は、それも心配してるんだよ」

と、隣の長屋から、激しく咳き込む声が聞こえてくる。

おくに「あら、源太さんまた具合悪いのかね」
清六「ちょっと見てきてやれや」
おくに「あいよ」

○同・源太の部屋

おゆうの実家である。おゆうの兄・源太が、煎餅布団で休んでいる。激しく咳き込み、苦しそうにしている。そこへ、おくにが入ってくる。

おくに「（駆け寄って）源太さん、大丈夫かい」

と、背中を優しくさする。

源太「すいません、おくにさん。いつも心配かけて」

おくに「良いんだよ、同じ長屋に住む隣同士じゃないか。困ったときは、お互い様ってもんだよ」

源太「しばらくどうも、身体が思うように動かなくて。それに、おゆうのことも心配で」

おくに「確かおゆうちゃん、呉服の間に勤め

てるんだろ。一度、私から文でも出そうか。
家族の病は、お宿下がりができるんじゃな
いのかい？」
源太「良いんです。かえって、あいつに心配
かけますから」
おくに「けど、おゆうちゃんだって、源太さ
んのこと心配ないんじゃないのかね。やっ
ぱり、一度おゆうちゃんに帰ってきてもら
ったほうが」
源太「……」
不安そうに源太を見るおくに。

○大工正吉の家・一室
正吉とおさとが朝食を食べている。
正吉「なあ、長兵衛にあの事、話したほうが
良さそうだな」
おさと「後添えのこと、やっぱり進めたほう
が良いのかね」
正吉「いつまでも一人ってわけにゃいかねえ
だろ。これからおはるちゃんだって大きく

なって、父一人子一人じゃ不安だろ。おはるちゃんだって母親と呼べる人がいねえと可哀想じゃねえか」

おさと「まあ、後は長兵衛さん次第だよね。あの人だって、今じゃあんたの見習いで大工やってるけど、元は立派な旗本のお侍さんだったんだ。それが、藩のお取り潰しにあって浪々の身となってたところをお前さんに拾われて。おはるちゃんも、まだあの頃は乳飲み子だったのに母親とも別れちまって……。あの二人見てると、不憫なんだよね……」

正吉「だから、せめて俺たちの手で幸せにしてやりてえじゃねえか」

おさと「そうだね」

正吉、無言で茶碗を差し出す。

おさと「朝からよく食べるんだから、この人は全く」

と、ブツブツ言いながらご飯を盛る。

○守田座・楽屋

鶴岡がじっと座っている――側で土下座したまま頭を上げない守田。と、そこへ、富十郎が入ってくる。

富十郎「守田座歌舞伎役者、市村富十郎でございます」

鶴岡「大奥御客応答、鶴岡でございます。本日は、大奥御中臈の村瀬殿のことで……」

富十郎「……」

守田、いきなり富十郎を殴りつける。

守田「馬鹿野郎ッ。おめえ、何てことしてくれたんだ。おめえって奴は……」

富十郎「……」

鶴岡「村瀬殿は、先立って自害いたしました」

富十郎「村瀬様が……」

守田「それだけじゃねえ。村瀬様のお腹には、おめえとの子までいたそうだ」

富十郎「俺との子……」

鶴岡「幕府が混乱している最中、筆頭御年寄の瀧山様にお仕えする村瀬殿は、そなたと

のことを誰にも告げられず、一人思い悩んで、自害する道を選んだのじゃ」

守田「申し訳ございませぬ。こいつには、死をもって罪を償わせます故」

鶴岡「これは瀧山様のご意向なのですが、富十郎殿には生きて償っていただく」

富十郎「……」

鶴岡「村瀬殿と、お腹の子の分まで生きてほしいというのが、瀧山様の願いなのです。富十郎殿、どうか命を大切に……。生きて、生きて償ってくだされ。そして、そなたを心から愛した村瀬殿のことを忘れないほしいのです」

富十郎「鶴岡様……」

鶴岡「本来であれば、遠島を申し付けられることが道理なれど、村瀬殿亡き今、瀧山様の特別の思し召しで、そなたにはお咎めなしとなった。これからも、歌舞伎役者として舞台に立ってくだされ。それが何より、村瀬殿への供養にもなろう」

富十郎「……」
守田「……」
鶴岡「守田殿。この者のこと、何卒よしなに
頼みますぞ」
守田「ははッ」
土下座をする富十郎と守田――鶴岡の
目には涙が浮かんでいる。

○江戸城・大奥・呉服の間
女中たちが着物を仕立てている――そ
の中にいるおゆう。奥の一室で、梅原
の母・おあつが来ており、反物を広げ
ている。梅原も同席している。
おあつ「（梅原に）なあ、おうめ。御台様も
おられぬ今、新しい反物なんぞ使い物にな
るのかね」
梅原「御台様はおられなくとも、着る楽しみ
を生きがいに勤めているお方もいるの。お
っかさんの取り越し苦労にはうんざりよ」
おあつ「心配なんだよ、私は。あんたは、呉

服問屋“富橋屋”の跡取り娘。まさか、生涯大奥に勤めるなんて言わないだろうね。今何課、江戸市中じゃ倒幕派のお侍さんが責めてくるんじゃないかって噂が流れてるんだよ。私しゃもう気が気じゃないんだよ。このお城だって、戦となったらどんなことになるか……。命懸けてまで、お城勤めすることはないんじゃないのかね。そこまでして、このお城に残ることはないと思うけど」

梅原「私は、瀧山様にお仕えして、ずっと大奥にいるつもりよ」

おあつ「おうめ……」

と、衣装の入った乱れ箱を持った染嶋が入ってくる。

染嶋「おゆう、瀧山様のお懐取を仕立てたのは、そなたじゃな」

おゆう「はい」

染嶋「襟元に街針が刺さったままであったぞ。瀧山様が袖を通された際に、首に針が刺さ

り、たいそう驚かれておった。針を抜き忘れるなど、言語道断じゃッ」

と、常盤が入ってくる。

常盤「何事ですか？」

染嶋「この者が、瀧山様のお懐取から針を抜き忘れたのでございます」

常盤「針に気づかずに、袖を通した瀧山様がお悪いのでは？」

染嶋「何を言われます」

常盤「呉服の間の者たちは、何枚もの呉服を仕立てているのです。針を抜き忘れることもありましょう。それをいちいち咎めていては、日が暮れてしまいましょう」

染嶋「（ムッとして）今後は気をつけるように」

と、そそくさと出ていく――唖然と見ている梅原とおあつ。

○同・同・静寛院の部屋

静寛院が、嘆願書を袱紗に包んでいる。

その様子を見守るように見ている藤子。

N「慶応四年正月二十日、静寛院は東海道先鋒総督兼鎮撫使の橋本実梁に宛てて書状を出した。徳川の家名存続嘆願と、官軍を差し向けた暁には死を覚悟しているという内容であった。そして、二月一日には将軍・慶喜が朝廷に対して謝罪恭順の意を示し、同月十二日に上野寛永寺にて謹慎したのであった」

○寛永寺・本堂

将軍・徳川慶喜が手を合わせている―

―住職・光庵が入ってくる。

光庵「こちらにおいででしたか」

慶喜「光庵殿」

光庵「何でございましょう？」

慶喜「世は、間違った人生であったのだろうか。この江戸幕府を開府された東照神君様に会わせる顔がない……」

光庵「神にも仏にも、分からぬことが、ただ

一つございます」

慶喜「何じゃ」

光庵「人の人生でございます。人が、どんな人生を生き、どのように歩んでいくのか、それは神も仏も分かりませぬ。ただ、運命に従うのみでございます」

慶喜「運命か……」

光庵「逃げることは、決して悪いことではございませぬ。現に、朝廷への恭順の意を示し、こうして上様は謹慎しておられる。それで良いではございませぬか」

慶喜「……」

光庵「偉そうなことを申しました。住職の説法に過ぎませぬ。ご容赦ください」

慶喜「いや、良き話を聞いた」

光庵「ご無理なされぬよう、ごゆっくりされるがよろしゅうございましょう」

平伏する光庵――再び手を合わせる慶喜。

○呉服問屋『富橋屋』・表～店

梅原の実家である。手前が店、奥が母屋となっている。丁稚・五助が、水を撒いていると、そこへ、両替商・権太夫がやってくる。

権太夫「おお、五助」

五助「和泉屋の大旦那、いらっしゃいませ」

権太夫「旦那、いるかい？」

五助「はい」

と、権太夫を中へ案内すると、奥に向かって、

五助「旦那、和泉屋の大旦那様がお見えです」

と、店主で梅原の父・建右衛門が姿を見せると、

建右衛門「これはこれは、和泉屋の。いつもご贔屓いただきまして。（と五助に）さ、早くお茶をお出しして。（と権太夫に）さあさあ、どうぞ（と奥へ案内する）」

○同・母屋の一室

おあつと、手代・喜八が話している。

喜八「女将さん、本気ですか……」

おあつ「私は、あんたの腕を見込んで頼んでるんだよ」

喜八「しかし、俺がお嬢さんと夫婦だなんて……」

おあつ「おうめときたら、大奥から戻ってくる気はないの一点張りでね……。もう私が何を言っても聞かないんだよ。けど、喜八がおうめと夫婦になることを認めてくれれば、あの子も考えるんじゃないかね」

喜八「そりゃ、お嬢さんのことはずっと好きでした。でもそれは、小さい頃から知っている幼馴染であって、夫婦になるなんて……」

おあつ「でも、このまま大奥に残ったら、命に関わることになるんだよ。何も、命投げ打ってまでお城勤めすることはないって言ってるんだけど、あの子も頑固だからね……」

喜八「おうめちゃんらしいと言えば、おうめちゃんらしいけど……」

おあつ「いつまでも手を焼く娘だよ、全く」

呆れ顔のおあつ。

○同・店

権太夫が帰る支度をしており、五助が手伝っている――見送る建右衛門。

権太夫「江戸が大分騒がしくなってるが、我々商人は商人らしく、お互いに頑張らねばな」

建右衛門「おっしゃる通り。では、ご注文の品は、この五助に届けさせます」

権太夫「よろしく頼みますよ。（と五助を見て）この子はよく働く。喜八と言い、こちらの従業員はみんな頑張ってる。ちゃんと大事にしてやってくださいよ」

建右衛門「はい、ありがとうございました」

五助「ありがとうございました」

と、出ていく権太夫。

五助「おいら、納戸の掃除してきます」
と、走っていく――目を細くして微笑む建右衛門。そこへ、奥からおあつと喜八が戻ってくる。
建右衛門「いつまで話してたんだよ。和泉屋の大旦那、お帰りになっちまったじゃねえか」
喜八「申し訳ございません」
おあつ「和泉屋さんより、おうめのことですよ。大奥勤めなんて辞めて、帰ってきたら良いのに。あなたは何とも思わないんですか？　おうめは私たちにとっては、大事な一人娘で、この富橋屋の跡取りなんですよ」
建右衛門「（呆れ気味に）分かってるよ」
おあつ「自分の娘より、ご贔屓さんのほうが大事なんですね」
建右衛門「おあっッ……（とたしなめる）」
ムッとするおあつ――おどおどしている喜八。

○江戸場・大奥・瀧山の部屋

瀧山が花を活けている――梅原がお茶を運んでくる。

梅原「お茶を持ってまいりました」

瀧山「ご苦労」

梅原「あの……瀧山様」

瀧山「何じゃ？」

梅原「薩長軍がお城に攻めてくるという噂を聞き、おなごたちの中には怯えて城を抜け出す者が後を絶たぬと聞いております」

瀧山「……」

梅原「これで、よろしいのでしょうか？」

瀧山「梅原」

梅原「はい」

瀧山「そなたは、どうしたい？　そなたは、大奥御用達の呉服問屋富橋屋の一人娘。家族が心配しているのではないか？」

梅原「私は、最後まで瀧山様のお側におりまする。大奥に勤めているうえは、この命、上様や徳川のために……」

瀧山「肝の据わったおなごじゃな……。しかし、そなたはまだ若い。その命、無駄にしてはならぬ」
梅原「……」
瀧山「私とて、今大奥のおなごたちを守る術を考えておるのじゃが、何も浮かばぬ……」
梅原「……」
　と、仲野が入ってくる。
仲野「申し上げます。御客応答鶴岡様がお見えでございます」
　と、鶴岡が入ってくる。
鶴岡「あ……改めましょうか？」
瀧山「構わぬ」
鶴岡「（仲野と梅原に）すまぬが、外してくれぬか」
瀧山「良い。（と鶴岡に）村瀬のことは、この者たちも承知の上じゃ」
鶴岡「さようでございましたか」
瀧山「何かあったのか？」
鶴岡「歌舞伎役者、市村富十郎でございます

が、役者を辞め、仏門に入った由」

瀧山「そうか……。舞台に立つよりも、御仏の道に入り、村瀬やお腹の子を弔いたいと思うたのであろう」

鶴岡「そのようなことをしたところで、村瀬殿やお腹の子が生き返るわけではございませぬ。御仏に入れば、その罪も許されるのでございましょか」

瀧山「鶴岡……」

鶴岡「村瀬殿や富十郎殿のことは、許されぬことでございます。その中で、私が一番許せぬのは、村瀬殿がお腹の子もろとも自害したこと。子どもに罪はないと言うのに……」

瀧山「そなた、離別した夫との間に、子がおったのであったな」

驚いて思わず顔を見合わす仲野と梅原。

鶴岡「私も一度は、母となった身。子を産むことは命懸けで、容易くは産めませぬ。ましてや生まれる前とはいえ、小さな命に変

わりはない。軽々しゅう扱えるものではございませぬ。歌舞伎役者と密通したことよりも、我が子に手をかけたことのほうが、重罪かと存じます」

瀧山「そうかもしれぬな……」

鶴岡「夫や子が、今どうしておるのかは存じ上げませぬが、子どものことを忘れた日は一日たりともございませぬ。今でも時折、夢にも出てきます。離別した夫は他人でございますが、子は自らの腹を痛めた、血の通った子でございます。なればこそ、私は村瀬殿が許せませぬ」

瀧山「……」

鶴岡「取り乱して、失礼いたしました。私は、これにて」

と、平伏すると去っていく――その鶴岡の後ろ姿を見つめる瀧山、仲野、梅原。

仲野「鶴岡様、夫と子がいらっしゃったのですね」

瀧山「まだ乳飲み子であったと聞いておる。見たであろう、今の顔。あの顔は、母の顔であったわ」
梅原「母の顔……」
瀧山「……」
梅原「瀧山様。三日ほど、宿下がりさせていただけないでしょうか。最後に、家族の顔を見たいと思って……」
瀧山「そなた、本気で……」
梅原「お願いいたします」
返す言葉もなく黙ったままの瀧山。

○同・同・実成院の部屋
実成院が酒を飲んで酔っている――側に控える藤野。
藤野「実成院様、そろそろお控えになってはいかがでしょうか」
実成院「そなたまで、あの嫁と同じことを申すのか」
藤野「私は実成院様のお身体を案じているの

です。御典医の宗伯殿も、昼間からの御酒は控えるようにとの仰せでございました」

実成院「自分の身体は、自分が一番分かっておる。それに、家茂公も亡く、今はあの慶喜が将軍になっておる。その煩わしさを無くすために、酒に頼って何が悪い」

藤野「しかしながら、全てを酒で忘れるのは如何なものかと……」

実成院「では、どのように忘れようと言うのじゃ」

藤野「それは……」

実成院「何も思い浮かばぬのであれば、偉そうに申すでないッ。迷惑じゃ」

と、立ち上がると、突然胸を押さえて、しゃがみ込む。

藤野「実成院様……？」

実成院「大事ない……大事ないわ……」

と、倒れ込んでしまう。

藤野「実成院様ッ……。（と外に向かって）誰か、御匙を……。早う御匙を……」

不安そうに実成院を抱える藤野。

○同・同・静寛院の部屋

静寛院が書物を読んでいる――藤野が来ており、報告している。傍らに藤子。

静寛院「母君が……？」

藤野「はい」

静寛院「すぐに参る（と立ち上がる）」

○同・同・実成院の部屋

実成院が寝込んでいる――宗伯が治療をしている。そこへ、静寛院、藤子、藤野がやってくる。

静寛院「母上……」

宗伯「御酒の量が多く、お身体を崩されたのでしょう。しばらくは、御酒をお控えいただきますように」

藤野「素直に聞いてくださるお方では……」

実成院「酒は……止めぬぞ」

藤野「実成院様……」

実成院「（静寛院を見て）宮さんも一緒か。
この醜い様を笑いに来られましたか」
静寛院「母君……」
宗伯「御酒を控えねば、お身体に障りますぞ」
実成院「こんな身体、どうなっても良いわ」
宗伯「何を仰せられまする」
実成院「慶喜が政権を朝廷に返上した時から、
もうこの徳川は終わったも同然。何の力も
及ばぬこの江戸城にいつまでもいたとて、
無意味なことではないか」
静寛院「……」
実成院「薩長軍が江戸城を責めるのであれば、
私もいっそのこと……」
静寛院「そのようなこと……」
実成院「宮さんは、京に逃げ帰れば良いが、
私にはそのような場所がないのじゃ」
静寛院「私は、徳川の人間。逃げ帰るなど、
考えも及びませぬ。家茂公と夫婦になり、
私は幸せにございました。この徳川に骨を
埋める覚悟もできました。東下りが嫌やと

言うた自分が、今になっては情けないぐらいでございます」

実成院「……」

静寛院「私にお任せください。徳川の家は、必ずや私が守ってみせます」

と、実成院の手を強く握る。

実成院「……」

宗伯「実成院様。まずは、しっかりと静養なされませ」

実成院「分かった……」

宗伯「では、私はこれにて」

と、平伏すると去っていく。

実成院「藤野」

藤野「はい」

実成院「明日から酒は控える。食事の支度も無用であると、御膳所にも伝えよ」

藤野「（笑顔になって）承知いたしました」

静寛院「母君……」

藤子「宮さん、よろしゅうございましたな」

安堵したように頷く静寛院。

○桜田御用屋敷・一室

天璋院が待っている――十三代将軍側室・豊倹院が入ってくる。

豊倹院「（驚いて）天璋院様ッ……」

天璋院「お志賀様……いえ、豊倹院様。お久しゅうございます」

豊倹院「私のほうこそ……何とまあ、お懐かしゅうございますな」

天璋院「本日は、豊倹院様にお伝えしたき儀がありまして、この桜田御用屋敷に参りました」

豊倹院「徳川の行く末のことにございますか」

天璋院「……」

豊倹院「こちらにいても、世の動きは耳に致します。薩長軍が、江戸攻めの支度を進めているとか。薩摩と言えば、天璋院様の故郷。さぞ、お心を痛めあそばしているのではないかと、案じておりました」

天璋院「かたじけなく存じます」

豊倹院「あの頃の平和な大奥は、もうないのですね」

天璋院「ええ……」

豊倹院「側室とはいえ、私も家定公のご寵愛を受けた身なれど、今の私には何もできぬことが辛いのです。それに、天璋院様のお立場とて危ういのでは……。本寿院様が陰で良う思われていないのも、察しがつきまする。側室だった折、上様お渡りの際にはあの本寿院様は酷く私のことを恨んでおりました故。天璋院様も、御台所とはいえお辛かったでしょう……。今も今とて、徳川と薩摩の間に挟まれておいでのご様子。何ともおいたわしいことと存じます」

天璋院「私は、家定公に嫁いだ折から、徳川の人間として生きる道を選びました。それでも、私の想いは母上様には通じないのです。今、幕府がこのようなことになり、家定公もあの世で、どれだけ嘆き悲しまれておられるか……」

豊倹院「私は、そうは思いませぬ」
天璋院「え……？」
豊倹院「家定公は、命を重んじるお方でした。幕府やお城が如何様になろうとも、生きて、生き続けさえすれば、嘆き悲しむことはないのではございませぬか」
天璋院「確かに、家定公はそういうお方でございましたな。狩りになど一度も行かれませなんだ。鳥やウサギを射ることはできぬと申されて」
豊倹院「左様でございましたな。外に出ぬ代わりに、書物を読み、時には御膳所でお菓子作りもされておりましたな」
天璋院「一度、私と家定公と豊倹院様で、お菓子を作ったことがありましたね」
豊倹院「誰が一番美味しく作れるか、競いあって。楽しゅうございました」
天璋院「家定公には敵いませなんだ……。何とも懐かしいことにございます」
豊倹院「もう、あの頃には戻れぬのですね」

天璋院「家定公と過ごした日々は、私にとって宝にございました」
豊倹院「私もにございます」
天璋院「これからも、菩薩を弔ってくださいませ」
豊倹院「天璋院様は、これからどうされるおつもりで？」
天璋院「薩長軍に、嘆願書を出そうと思うております」
豊倹院「お聞き届けくださると良いですが、相手は薩長のお侍様。天璋院様の想いが通じるかどうか……」
天璋院「その時はその時です。闘わねばならぬことになりましょう」
豊倹院「天璋院様……」
天璋院「豊倹院様、どうか息災で……」
じっと天璋院を見つめる豊倹院。

○呉服問屋『富橋屋』・母屋・廊下
五助が床拭きをしている――右往左往

しながら、時折水で洗い流している。
と、一室から、建右衛門の怒鳴り声が
聞こえてくる。
建右衛門の声「許さんッ」
五助、その声にハッとなると、襖の前
まで来て、聞き耳を立てる。

○同・同・一室
梅原、建右衛門、おあつが深刻そうに
話している。
建右衛門「お前を大奥へ奉公にやったのは、
行儀見習いのためだ。命まで預けることを
許した覚えはない。この富橋屋が、大奥御
用達とは言え、何もお前までそんなことす
ることはないだろ」
おあつ「私だって、お前には何度も言ってる
だろ。おうめ、あんたはこの富橋屋の跡取
り娘なの。いずれは婿を取って、ここを切
り盛りしてほしいんだよ」
建右衛門「俺たちが隠居したら、この店はお

前がやっていくんだ。それの何が気に入らなくて……」

梅原「私、お店なんていらない。今はとにかく、瀧山様にお仕えすることが……」

おあつ「（遮って）確かに瀧山様は、大奥を束ねておられる筆頭御年寄。そんなお方の元で部屋子ができるなんて幸せ者だし、私たちにとっても自慢なんだよ。でもね、いくら瀧山様のお側にいたいからって、命まで預けることはないんじゃないかって言ってるんだよ。瀧山様だって、あんたにそんなことを望んでやしないだろう……」

梅原「……」

おあつ「私はね、喜八とあんたを夫婦にさせて、一緒にこの店を継いでほしいと思ってるんだよ」

梅原「私が、喜八さんと……」

建右衛門「喜八は、幼少の頃から丁稚としてうちに奉公して、勝手もよく分かってる。それに、実家は油問屋で、あいつは三男坊

だ。商いの血も通ってるし、継ぐのは喜八じゃない。これほどのめぐりあわせ、他にはないだろ」

梅原「じゃあ私は、このお店のために喜八さんと一緒になれとでも言うの？」

おあつ「兄妹同然で育った仲じゃないか。お互いのことはよく分かってるし、知らないところに嫁に行くより、幸せじゃないか」

梅原「お父つぁんは、おっかさんの幸せと、私の幸せは違うの」

建右衛門「おうめッ……」

梅原「どう言われようが、私は大奥に残りますッ」

おあつ「おうめ……」

建右衛門「そうか……そこまで言うなら、好きにするんだな」

おあつ「あなた……」

建右衛門「そなたとは、もう親でもなければ子でもない。今日限りで、親子の縁を切る」

おあつ「そのようなご無体なこと……」

○同・同・廊下

話を聞いている五助――慌てて走って、店のほうへ向かう。

○同・同・店

喜八が反物の整理をしている――五助が報告に来ている。

喜八「え……お嬢さんが？」

五助「喜八さん、このままだとお嬢さんが……」

喜八「……お嬢さんが、そう決めたのなら、俺は止めないよ」

五助「喜八さん……」

喜八「これは、お嬢さんの人生だ。いくら旦那さんや女将さんでも、お嬢さんの決めたことを変えることはできない」

五助「喜八さんは、それで四ですか？」

喜八「子どもに何が分かるんだよ」

五助「おかしいじゃありませんか、こんなの。

これじゃ、誰も幸せにならない……」
喜八「……」
五助「何が大奥ですか……。戦になったら、その大奥が無くなることぐらい俺にも分かります。だったらせめて、お嬢さんに喜八さんの気持ち伝えたらどうなんですか」
喜八「五助、お前……」
五助の目に涙が浮かんでいる――と、そこへ、母屋から梅原が戻ってくる。
喜八「あの、お嬢さん……。ちょっと、よろしいですか？」
梅原「うん」

○同・同・表
梅原と喜八が話している。
喜八「本当に、大奥に残るんですか？」
梅原「喜八さんまで、その話」
喜八「旦那さんや女将さんを悲しませてまで大奥に残るお嬢さんの気持ちが、俺には分かりません」

梅原「……」

喜八「俺と夫婦になることが嫌なら、はっきりそう仰ってください」

梅原「そうじゃないの……」

喜八「だったら……」

梅原「私はね……大奥の女として、生きることを選んだの。呉服問屋富橋屋の娘・おうめとしてではなく、大奥筆頭御年寄・瀧山様付きの部屋子・梅原として」

喜八「お嬢さん……」

梅原「喜八さんのことは大好きよ……けど、夫婦にはなれない」

喜八「……」

梅原「お父っぁんや、おっかさんのこと、お願いね。あと、五助のことも可愛がってあげて」

喜八「……」

梅原「さようなら……」

と、去ろうとすると、喜八が梅原の腕を強くつかむ。

梅原「……」

突然、梅原を抱きしめる喜八。

梅原「喜八さん……」

喜八「行かないでくれ、おうめちゃん……」

梅原「……ごめんなさい」

と、喜八を拒むと去っていく――呆然と立ち尽くしている喜八。

○長屋・源太の部屋

源太が横になって寝込んでおり、おゆうが見舞いに来ている――傍らにおくに。

源太「こんな時に、よく宿下がりのお許しが出たな」

おゆう「おばさんから文をいただいて。親兄弟の病気は、特別にお宿下がりが許されるの」

おくに「おゆうちゃんには知らせるなって、源太さんから言われてたんだけど、たった一人の妹だろ。心配で、矢も楯もたまらな

くてね……」
おゆう「おばさんには、いつもご心配ばかり……」
おくに「私は良いんだよ。ただ、源太さんが一人だから、つい気になっちまってね。今日は調子良いみたいだけど、昨日までは酷く咳も止まらなかったんだから。それで、早くおゆうちゃんに伝えなきゃと思って」
おゆう「ありがとうございます」
おくに「ねえおゆうちゃん。そろそろ、大奥から戻ってきてはどうかね？」
おゆう「……」
おくに「いつまでも、源太さんを一人にしておくわけにはいかないだろ。私はいつでも看に来ることはできるけど、やっぱり源太さんにとっては、血を分けた妹に看病してもらうことが一番の薬になると思うんだよ。今、お城だって大変なんだろ。江戸市中じゃ、その話でもう持ち切りで、私やうちの人だって、大奥勤めしてるおゆうちゃ

んのことが気になってたんだよ。この辺りで、お暇をもらってさ」
源太「おばさん、その話は……」
おくに「私は、あんたたち兄妹のことが心配なんだよ。ねえ、おゆうちゃん。何も大奥勤めにこだわることはないじゃないか……」
おゆう「私だって、兄の側にいてあげたいです。でも、兄のためには、こうするより他に……」
おくに「……」
おゆう「全ては、兄のためなんです」
源太「すまねえな、おゆう……」
おゆう「兄さん、もう少しの辛抱だからね」
源太「おゆう、無茶だけはするなよ」
おゆう「分かってる。（とおくにに）おばさん、今しばらく、兄のことお願いします」
おくに「おゆうちゃん……」
やり切れないようにおゆうを見つめるおくに。

○江戸城・大奥・千鳥の間

瀧山が険しい顔で書物を見ている――

書類の束を持った波路が呆れ顔で入ってくる。

波路「瀧山様」

瀧山「波路殿、如何なされた」

波路、書類を叩きつけるように瀧山の前に置く。

瀧山「……」

波路「これら全て、宿下がりの届けにございます。皆、親や兄弟が病に伏せていると記しておりますが、偽りでございましょう」

瀧山「……」

波路「ただでさえ、無断で城を抜け出す者が後を絶たぬというのに、このような……。今の状態が続けば、大奥のおなごたちはいなくなりましょう。さすれば、この大奥の意義はどうなりますことやら」

瀧山「……」

波路「瀧山様。このご失態、もはやただでは
済みませぬぞ」
瀧山「……」
と、常盤が入ってくる。
常盤「申し上げます。軍艦奉行・勝安房守様
が火急の御用で登城され、瀧山様にもご同
席をいただきたい由にございます」
瀧山「（書物を閉じると）すぐに参る」
と、動じない顔で去っていく――憤然
とその瀧山の後ろ姿を見送る波路。
常盤、波路の様子に気づくと、
常盤「波路様……？」
波路「おのれ瀧山……」
常盤「弥平次を使わします」
波路「頼む。いつまでも、この大奥をあの女
の天下にしておくわけにはまいらぬ。瀧山
め……己の浅はかさを知るが良い」
○同・表・御広座敷
瀧山、勝、尾田、青山が話している。

瀧山「薩長軍が、江戸に向かっている……」
勝「はい……」
尾田「上様が恭順の意を示されて寛永寺にご謹慎されておられるというのに……」
青山「上様という主のいない江戸城を攻めたところで、どうなるものでもございますまい」
瀧山「薩長軍の狙いは、一体何なのじゃ……。上様の首級ではないのか」
勝「それもあるかと存じますが、おそらく薩長が求めているのは、幕府の持つ権威、そしてその象徴である、この城そのものでございましょう」
尾田「しかし、徳川の政権は前年、朝廷に返上したではないか。もはや今、幕府はあってないようなもの」
勝「返上したとて、これまで政を司ってきたのは徳川。今になり、誰ぞ政を司れる者がおりましょうや」
青山「では、薩長軍が手に死体のは、その政

……」

尾田「田舎侍共に何ができよう。薩長も朝廷も、徳川が培ってきた二百六十年の政の力を何と心得るか」

待つ「田舎であろうが、都であろうが、徳川の勢力が地に落ちてる今、通じる相手ではございませぬ」

青山「どうしろと言うのじゃ……」

尾田「兵じゃ……兵を出して、薩長を討つ」

青山「早急に支度をせねばなりませぬな」

尾田「もはやこれまで。上様をお守りするためじゃ、致し方あるまい」

勝「方々待たれよッ……」

尾田「安房守殿、この期に及んで、戦を止めるとは言わせぬぞ。薩長を討たねば、我らが討たれてしまうのだ」

勝「お気持ちはお察しいたします。されど、このような時に兵を出すことなど、上様が望んでおられるとお思いか」

青山「しかし、武力が迫ってる今、こちらも

武力で挑まねば負けてしまいます」

瀧山「本当に武力でしか、この争いを止めることはできぬのか。戦になれば、どれだけの命を失うことになるか」

尾田「徳川を守るためじゃ。犠牲はやむを得ん」

瀧山「しかし……」

尾田「そのような詭弁を申されている時ではない。相手が武力強兵ならば、我らとて武力で薩長を迎え討つしかあるまい」

瀧山「それこそ、上様の謹慎が無意味になる。将軍自らが謹慎をするなど、幕府開府以来、前代未聞のことじゃ。朝廷への恭順のために謹慎を選ばれた上様のお気持ちを無碍にされるおつもりか。それに、静寛院様は既に東海道先鋒総督殿宛てに嘆願書を出しておられ、天璋院様も故郷の薩摩宛てへの書状の御支度をなされております。今、一時の感情で兵を上げれば、むしろ徳川は世の笑いものになりましょう」

尾田「……」

青山「……」

瀧山「兵を出すことは簡単やもしれぬ。されど戦となれば、いくつの命が散り、どれだけの者が悲しむことになろうか。天下泰平の世を築き上げてきた江戸幕府が、これほど命を無駄にして良いという道理がない。兵を出す前に、今一度よく考えられよ。徳川家存続のためにも、今薩長や朝廷を逆撫でするようなことだけは、控えねばならぬ」

返す言葉もなく黙ってしまう尾田と青山。

○同・茶室

瀧山の立てた茶を飲み干す勝――冷静に座っている瀧山。

勝「（笑って）尾田殿や青山殿の鼻を明かしてやりましたな」

瀧山「私はただ、思うたことを言うたまで」

勝「しかしそれは全て、理に適っておりまし

ょう。拙者も瀧山殿のお考えには、感服いたしました」

瀧山「兵をあげるなど、とんでもない。勝殿も、ようお止めくださいましたな」

勝「拙者はただ、上様の想いをくみ取った上のこと。上様も、戦など望んではおられぬでしょう」

瀧山「表も大奥も、分裂しているのでございますね」

勝「大奥でも、何か？」

瀧山「波路殿が、どうも……」

勝「波路殿と言えば、瀧山殿と同じ御年寄の……」

瀧山「ええ。大奥でも、宿下がりを申し出ている者が多数ありましてな……。このまま大奥からおなごがいなくなることを、ひどく危惧しております」

勝「波路殿は、おそらく瀧山様の座を狙うておいでは？」

瀧山「分かっております。御年寄の職に就い

たのは、あちらが先。私に越されたことが、今でも気に入らぬのでございましょう」

勝「今はそのようなことで争うておる時ではない……。女の嫉妬というのは、げに恐ろしゅうございますな」

瀧山「何とか、大奥を一つに束ねねば……」

○同・大奥・波路の部屋

弥平次が来ており、波路と常盤に報告している。

波路「では、ご老中方は、戦の支度を？」

弥平次「それに異を唱えたのが、瀧山様と勝様でございました」

常盤「武力に対して、一体何で戦うおつもりなのでございましょうか」

弥平次「瀧山様におかれましては、是が非でも武力での争いを避けておられるご様子にて」

波路「そのような悠長なことを言うておられれる時ではござらぬ」

常盤「波路様。このまま大奥が崩壊するようなことになれば、それこそ瀧山様もおしまいでございましょう。この際、先手を打たず、少しお待ちになってみては？」
波路「何を申す。そこまで待ってはおられぬ。ただでさえ、幕府の礎がない今、この大奥をあのようなおなごに任せて良いものか」
常盤「……」
と、おゆうが入ってくる。
おゆう「お呼びでございましょうか」
波路「待針、ようやってくれた」
おゆう「いえ……」
波路「兄の様子は、どうじゃ」
おゆう「お宿下がりの時は、調子も良うございましたが、まだ安心はできぬ様子にて」
波路、懐から金子の束を取り出すと、常盤に渡す――常盤、その束をおゆうの前に差し出す。
波路「これは、先立っての褒美じゃ」
おゆう「こんなに……」

常盤「波路様のお気持ちじゃ。遠慮のう受け取るが良い」
おゆう「はい……」
波路「時におゆう。兄のためには、まだ金子が必要なのではないか？」
おゆう「それは……」
常盤「兄を助けたいのではないか？　そなたは、唯一の肉親であろう」
おゆう「……」
波路「（おゆうの側まで来ると）何も難しいことをするのではない。ただ、茶に毒を含ませれば良いだけのこと」
おゆう「毒……？」
常盤、弥平次に目配せをする――弥平次、懐から赤い薬包紙を取り出すと、波路に渡す。
波路「（受け取り）これを、瀧山様のお茶へ」
おゆう「……」
波路「できるな？」
と、おゆうへ渡す――おゆう、手を震

わせながら薬包紙を受け取ると、
おゆう「承知いたしました」
頷く波路。

○大工正吉の家・一室（夜）
正吉と長兵衛が話している。
正吉「どうだい。あれから考えてくれたか？」
長兵衛「ありがたい話ですが、やっぱり私には……」
正吉「お前やおはるちゃんを捨てた女に、まだ未練があるってえのかい？」
長兵衛「捨てただなんて……。いつまでも仕官が決まらず、酒に逃げた私に愛想が尽きたのです。あの時の私は、捨てられて当然の男でした」
正吉「それでも、おはるちゃんって子がいるんじゃねえか。子どもも捨てて逃げるなんて、そんなことあっちゃいけねえんだ」
長兵衛「女房は、一人で生きていくことで精一杯だったんですよ。私やおはるをどんな

気持ちで捨てたのか、今になったらよく分かるんです」

と、おさとが入ってくる。

おさと「おはるちゃん、気持ち良く寝ちまってるよ。可愛い寝顔して、ありゃ母親譲りかね」

正吉「よさねえか。今、ちょうどその母親の話してたんだよ」

おさと「長兵衛さん。私たちはね、長兵衛さんやおはるちゃんのためには、後添えがいたほうが良いと思って、世話しようと考えてたんだよ。でもね、長兵衛さんが、それでも後添えがいらないって言うんだったら、私は良いと思ってる」

正吉「おさと、お前何てこと言うんだよ」

おさと「私たちがどう考えようが、家族ってのはそれぞれ違うんだよ。私たちの考える幸せと、長兵衛さんやおはるちゃんの幸せが違うのは当然のこと。無理に、私たちの考えを押し付けるのは良くないんだよ。お

はるちゃんにとって、母親は一人だってい
う長兵衛さんの考えがあるんだったら、そ
れを尊重してやるのが、私たちじゃないの
かね。お前さんが長兵衛さんを大事に思う
んだったら、長兵衛さんに決めさせるのが、
正しいんじゃないのかい？」

長兵衛「女将さん……」

正吉「……」

おさと「（笑って）いらないお節介焼いちま
ったようだね。もうこの話は忘れておくれ。
（と正吉に）なあお前さん、それで良いだ
ろう」

黙ったままの正吉。

○江戸城・大奥・廊下～天璋院の部屋（夜）

幾島が歩いている。天璋院の部屋に灯
りがついていることに気が付くと、中
を覗く――天璋院が書をしたためてい
るのが見える。

一心不乱に書状を書いている天璋院を、

ただじっと見つめている幾島。そこへ、ませが通りかかる。幾島、ませに気づくと、目配せをする。ませも、天璋院の姿に気づくと、じっとその姿を見つめる。

天璋院、一度筆を止めると、大きな溜息をつき、また新しい半紙を取り出して書き直す。幾島やませの姿にも気づかず、ひたすら書に向かう天璋院。

幾島とませ、天璋院の姿を見ると、ゆっくりと平伏して、その場を去っていく。

時に手を止めながらも、筆を進めていく天璋院。

○同・同・呉服の間（数日後）

おゆう、その他女中たちが、呉服を仕立てている――と、そこへ、鶴岡が入ってくる。

鶴岡「おゆう。そなたに文が来ておる」

おゆう、一礼して、文を受け取る――
文は、おくにからである。封を開けて、
読み始めるおゆう。段々と顔が険しく
なっている。

○長屋・源太の部屋

白布が顔に被さった源太が横になって
いる――憔悴したように、清六とおく
にが付き添っている。
と、勢いよく戸が開き、おゆうが入っ
てくる。

おゆう「お兄ちゃん……」
と、呆然とした顔で駆け寄る。おくに、
鼻をすすりながら、
おくに「おゆうちゃん……」
清六「今朝だったんだ……」
おゆう「……」
清六「ゆっくり逝っちまってよ」
おゆう、白布を取る――安らかに死に
顔の源太である。

すがりつくように泣きじゃくるおゆう。
おくにも、もらい泣きする。
清六「まだ若けえのによ……こんな辛いことあるかい。おゆうちゃんに心配かけないように、早く元気にならなきゃって言ってたのによ……。神も仏もありゃしねえじゃねえか」
おゆう「……」
と、与作が駆け込んでくる。
おくに「与作さん……」
与作「表で、源太さんが亡くなったって聞いてよ……。（と源太を見て）何で言っちまったんだよ、源太さん」
おくに「本当だよ……こんなに早く……」
おゆう「皆さん……これまで、兄がお世話になりました」
おくに「これから、どうするんだい？」
おゆう「まだ分かりません……。ただ、大奥でやり残したことがあります故、ひとまずはお城に戻ります。長屋の引き払いは、ま

た改めて……」

清六「慌てることはねえよ。今は源太さんの側にいてやんな」

与作「そうだよ。妹に見送ってもらえれば、源太さんだって成仏できらぁ」

おゆう「はい……」

おくに「お腹空いただろ？　何か拵えて、持ってくるよ」

おゆう「ありがとうございます」

出ていくおくに。

与平「俺も、魚の一匹二匹持ってくるよ」

おゆう「そんな」

与平「良いってこと。最後ぐらい、源太さんのために、魚屋らしいことさせてくれや」

おゆう「ありがとうございます」

頷くと、出ていく与作。

○同・清六の部屋

厨で、泣きながらおむすびを握っているおくに。

○同・源太の部屋

源太の死に顔をただ見つめているおゆう――見守るように、隣で控えている清六。

○江戸城・大奥・長局の廊下

常盤が歩いている――反対側から鶴岡が歩いてくる。お互い、歩きながら一礼をする。鶴岡、すれ違いざまに、

鶴岡「近頃、不穏な動きが目立ちますな」

常盤、立ち止まる。

常盤「……」

鶴岡「波路様のお部屋に、頻繁に出向かれているご様子。何を企みか？」

常盤「企みとは、異なことを仰せられまするな」

鶴岡「(常盤の元へ来ると)密偵まで使って、何を探っておられるのですか？」

常盤「表の話は、すぐには我らの耳には入り

ませぬ。私は表使として、今表でどのような動向になっているのか、それを踏まえ、どのような手段を選ぶかを波路様に進言しているだけのことでございます。そのために、弥平次を遣わせているのです」

鶴岡「進言されるのであれば、何故瀧山様にはなされぬのです？」

常盤「……」

鶴岡「大奥を束ねておられるのは、瀧山様。波路様に進言される前に、まずは筆頭御年寄である瀧山様にされるのが、道理ではございませぬか？」

常盤「私が誰に進言しようが、鶴岡様に指図される覚えはございませぬ」

と、去っていく――険しい顔でその後ろ姿を見ている鶴岡。

○同・同・廊下

仲野が茶を運んでいる。影でおゆうが控えている。一呼吸置くと、わざと仲

野にぶつかり、お茶がこぼれる。
おゆう「申し訳ございませぬ」
仲野「お気をつけなされ」
おゆう「それは、瀧山様へのお茶でございますか？」
仲野「そうじゃ」
おゆう「しばしお待ちくださいませ。すぐに新しいものをお持ちいたします」
と、奪い取るように湯飲みを持つと、慌てて去っていく――呆気に取られている仲野。

○同・同・瀧山の部屋
瀧山と鶴岡が話している――控える染嶋と梅原。
瀧山「では、常盤が波路殿と通じておると申すのか？」
鶴岡「いささか妙でございます。それに、弥平次と申す密偵を遣わしており、何かを探っている様子。油断はなりませぬ」

瀧山「波路殿一人ではないと思うていたが、
表使の常盤と繋がっておったとは……」
と、仲野がお茶を運んでくる。
仲野「お茶をお持ちいたしました」
瀧山、お茶を飲もうとする――と、そ
こへ、おゆうが駆け込んでくると、
おゆう「口をつけてはなりませぬッ……」
瀧山「おゆう、如何した？」
おゆう、湯飲みを奪い取ると、中庭に
出て湯飲みごと投げ捨てる。
鶴岡「おゆう、そなたもしや……」
おゆう、土下座をすると、
おゆう「申し訳ございませぬ。瀧山様のお茶
に、毒をお入れ致しました」
瀧山「何と……」
おゆう「先立っての待針も、わざと私が仕込
みました……」
染嶋「何故そのような……」
おゆう「……」
と、波路と常盤が入ってくる。

波路「何やら騒がしゅうございますが、一体何事でございましょうか？」
瀧山「……」
鶴岡「……」
染嶋「（おゆうを見て）この者が、瀧山様に毒を盛られ……」
波路「何と恐ろしきおなごじゃ」
常盤「瀧山様、この者の処分、如何されるおつもりでございますか？」
瀧山「（おゆうに）誠、そなた一人でしたのか？」
おゆう「……」
瀧山「口を割らぬか」
おゆう「……」
染嶋「おゆう……」
仲野「……」
梅原「……」
鶴岡「瀧山様に、全て申し開きするのじゃ。事と次第によっては、瀧山様とて特別のお慈悲をもってお許しくだされよう」

おゆう「それは……」

波路「瀧山様のお命を奪おうとした大罪人に、お慈悲なんぞ無用にございましょう」

と、常盤に目配せをする――常盤、おゆうを羽交い絞めにする。

おゆう「何をなさいます……」

波路が懐剣を抜くと、おゆうの悲鳴が響き渡る。波路、おゆうの心臓に刀を突き刺す。

唖然となる瀧山、鶴岡、染嶋、仲野、梅原。

波路「（おゆうの耳元で）役立たずめ」

と、刀を抜く――おゆう、その場で倒れて絶命する。

波路「おゆうの死骸は、早々に処分いたします。瀧山様を亡き者にしようと命を狙うた不届き者でございます故」

と、一礼して去っていこうとする。瀧山、それへ、

瀧山「待たれよ、波路殿」

立ち止まる波路――波路の側まで来る
瀧山。
瀧山「おゆうは、誠一人で、このような大それたことをしたと思うか？」
波路「何を仰りたいのです？」
瀧山「おゆうは、そなたの差し金で動いたのではあるまいか？」
波路「何故、そう思われます？」
鶴岡「常盤殿と結託しておること、我らが知らぬとお思いですか？」
波路「何のことやら」
常盤「私も存じませぬ」
瀧山「そなたらが、おゆうに命じたのではないか。呉服の間のおなご一人が、私を狙うたところで何になる。今私が死んで好都合になるのは、波路殿、そなたではないか」
波路「（怒鳴って）言いがかりも大概になさいませッ」
瀧山「……」
波路「心外でございますな。このように疑わ

れるなど」

常盤「瀧山様、鶴岡様。そこまで申されて私たちをお疑いならば、確かな証拠でもおありにございますか？　もしあるのであれば、改めて見せていただきましょう」

不機嫌そうに去っていく波路と常盤。

瀧山、おゆうの亡骸を抱え込むと、その死に顔を見つめる。その様子をやり切れないように見ている鶴岡、染嶋、仲野、梅原。

○同・同・長局の一室（夜）

仲野と梅原が、布団を敷く支度をしている。

仲野「まさかおゆう殿が、あのようなことを……。お茶に毒が入ってたなんて、思うはずないでしょ」

梅原「やはり、波路様の仕業でしょうか？」

仲野「でも、その証拠はどこにもない。鶴岡様は、常盤様も結託していると仰ってたけ

ど、それだって、一緒にいるだけでは、何の証拠にもならぬ」

梅原「波路様は、瀧山様の何が気に入らぬのでしょう」

仲野「梅原殿は、ご存知ないのですか？　御年寄になったのは、波路様のほうが何年も先。にも関わらず、筆頭になられたのは瀧山様。波路様にとっては、瀧山様は言わば長年の宿敵なのです。筆頭御年寄の職に就き、大奥を我が物にしたいのが波路様の狙い。瀧山様の存在を消したいと思われる魂胆は、明々白々」

梅原「今の波路様が、筆頭御年寄の器になれるとは到底思えませぬが」

仲野「そのようなこと、決して外では……」

梅原「分かっております」

仲野「今日はもう寝ましょう」

梅原「はい」

それぞれ布団に入る仲野と梅原。

○桑名・光徳寺・全景

N「その頃、静寛院の使者として嘆願の書状を届けるために、女官の土御門藤子は京へ向かっていた。当時、関東から西上する場合、男性は草津までしか行くことが叶わなかったが、女性であり、先の帝・孝明天皇の妹である静寛院の使者である藤子は、入京が叶ったのである。その途中、藤子は桑名の光徳寺にて、東海道先鋒総督参謀兼鎮撫使である、橋本実梁と面会をしていた」

○同・同・一室

藤子が待っている――と、そこへ、東海道先鋒総督参謀兼鎮撫使・橋本実梁が入ってくる。

藤子「（平伏して迎えると）静寛院様の名代として大奥より参りました、土御門藤子でごじゃります」

橋本「東海道先鋒総督、橋本実梁にごじゃり

ます。江戸からの長旅、大儀であらしゃいましたな。これから、京にも向かわれるとか。久方ぶりの京の都。ごゆっくりされるがよろしかろう」

藤子「お言葉、かたじけのう存じます」

橋本「宮さんは、お元気であらしゃいますやろうか？」

藤子「家茂さん、お兄上の孝明帝が身罷ってよりこの方、宮さんは江戸で寂しゅうお暮しでごじゃります」

橋本「家茂さんも、お身体が弱いのに、無理にご上洛なされて……。まだお若いのに、おいたわしいことでごじゃりますな。後を追うように、先の帝も薨去あそばされ、さぞお心細くいらっしゃいますやろうな」

藤子「それだけやあらしません。薩長軍が朝廷と手を組み、江戸城を攻めようとされんとする旨、江戸城大奥の耳にも入っております。聞けば、東征大総督をされておられるのは、有栖川宮熾仁さん。あなた様もよ

うご存知であらしゃいましょう。宮さんの許嫁であったお方でごじゃります」

橋本「無論でございます」

藤子「これでは、宮さんがお可哀想とは思われませぬか。お互いを思うていたお方同士が、今敵同士になるやもしれんのどす。まして、乱世にもなりかねる事態となってる今、それだけは避けねばなりません」

橋本「……」

藤子、書状を橋本の前に差し出す。

橋本「これは？」

藤子「宮さんがお書きになった書状でごじゃります。慶喜公の命をお救いいただき、徳川の家名存続を願い出ておられます。万一の時には、ご自害あそばされるご覚悟とか。私も、宮さんのため、徳川のためやったら、命は惜しゅうはありません」

橋本「宮さんも、あんさんも、何故そこまで徳川に肩入れなさるんや？」

藤子「徳川の人間だからでごじゃります」

橋本「徳川の人間……」

藤子「宮さんは、江戸へ下り、家茂さんのご正室になられた頃から、徳川の人間として生きる道を選ばれたのでごじゃります。幼き頃より私は、宮さんのお側でお仕えし、健やかにお育ちあそばされるのを、この目でずっと見てまいりました。亡きお母上・勧行院さんも江戸へ下ると聞いた時は、私もご一緒せねばならぬと決めました。公武合体で思いがけず江戸へ行き、大奥では武家派と公家派で争うことも多々ごじゃりました。しかしながらそれも、今となっては小さき争いに過ぎませんでした。宮さんとて、東下りは争うためではごじゃりません。全ては世のため、帝の御為になされしこと。その帝も、今やこの世の御人にあらず。家茂さんも亡くなり、落飾された今もなお、何故このようにお辛い立場にならねばならぬのか……。あなた様も、帝にお仕えする朝廷の御身なれば、宮さんの気持ち

とて、少しは分かりましょう」
橋本「……宮さんもあんさんも、強きおなごにあらしゃいますな。あんさん、この後京に行かれるそうやけど、どないするおつもりや？」
藤子「議定や参議にお目にかかり、徳川存続の嘆願をしようと思うております。お聞き届けいただくまで、江戸へ戻るわけにはまいりませぬ」
橋本「……」
藤子「私は、宮さんの名代として京へ上洛するのです。私の言葉は、宮さんのお言葉。宮さんの想いが、朝廷のお方々に伝わらねば、私は江戸へ戻れることなどできませぬ。幾日かかろうと、宮さんの嘆願をお聞き届けくださるまでは、京に残ります」
橋本「……」
藤子「橋本様におかれましても、どうか宮さんのお気持ちをお分かりいただいて……。
（と書状の蓋を開け）何卒、お聞き届けの

ほど、お願い申し上げます……」

と、深々と頭を下げる――その藤子を

じっと見つめている橋本。

○江戸城・大奥・天璋院の部屋

瀧山が天璋院の前で平伏している――

難しい顔の天璋院。

天璋院「瀧山。そなた、筆頭御年寄の職を辞するなど、誠そのようなこと……」

瀧山「申し訳ございませぬ」

天璋院「訳を、聞かせてくれぬか」

瀧山「これ以上、筆頭御年寄として、大奥を束ねる自信が無くなったのでございます」

天璋院「そなたらしゅうもない。これまで、どのようなことがあっても、この大奥のために尽くしてきたではないか。大奥のおなごたちの中には、そなたに憧れている者もいると聞く。筆頭御年寄は、表の老中に匹敵する役目。そなたを敬う者がいるのは当然のこと。それに、今江戸城がこのような

時に、筆頭御年寄の職を辞するなど……それこそ、私だけではなく、大奥のおなごたちが止めるに決まっておる。今の大奥には、そなたがいなければ……」

瀧山「有難きお言葉に存じます。されど今回ばかりは、大奥が残るか残らぬかの瀬戸際にございます。まして私だけでは、薩長軍から大奥を守ることなど、できる道理がございませぬ。刀や銃を持った軍勢が押し入れば、この江戸城が戦場となり、大奥とて血の海になることは避けられませぬ。上様のため、江戸幕府のため、そしてこの大奥のために、これまで職を全うしてきましたが、やはり千人の女たちの命まで預かるなど、私にはとても……。それに私は、お付きの中臈一人の命すら守ることはできませんでした。その者は、歌舞伎役者と密通し、子を身ごもっておりました」

天璋院「……！」

瀧山「私は、毎日その者と顔を合わせておき

ながら、何一つ気づいてやれませんでした。密通のことを告げたら、当然大奥からは追放。歌舞伎役者にも、相応の処分が下りましょう。身寄りもないうえに、身ごもの身体とあっては、一人で生きていくことさえ難しいことと思った故、自害するより他なかったのでしょう。それに、江戸城が戦火となる前に、逃げ出した女中の数は計り知れませぬ。逃げ出すことができるということは、お郷など、少なくとも帰る場所があるということでございましょう。しかし大奥の中には、身寄りがなく、誰に頼るところもなく天涯孤独で、大奥にしか居所のない者も多数おります。その者たちは、これからどうなるのでしょう。天璋院様や静寛院様、本寿院様、実成院様とて同じでございます。大奥が終の棲家となっているお方は、城と共に散れということでございましょうか。そのような状況に陥った今の大奥を、私が守ることなど到底できませぬ……」

天璋院「私は、元々薩摩島津家の分家の娘であった。薩摩で夫を見つけ、薩摩で骨を埋めることが当然と思って生きてきた。じゃが、時の藩主であった島津斉彬公の目に思いがけず止まり、本家の養女となった。養女にされたのは、斉彬公が私を将軍家に嫁がせたいためであった。そなたもよく知っての通り、私を家定公に嫁がせたのは、次期将軍に一橋家の慶喜公を推挙するよう、家定公に進言するため。政に利用されるのは、いつの時代もおなご。私も、そのようなことのために家定公と愛のない夫婦になることは致し方ないと思って、覚悟も決めた。しかし、家定公は私や豊倹院お志賀の方様と一緒の時は、それはそれはひょうきんだったのじゃ。この方となら、良き夫婦になれると心から思った。家定公が、次期将軍を紀州の家茂公に決められた時とて、私は何も思わなかった。良き夫婦として、一緒に生きていければそれで良いよ。

家定公は、私が嫁いで僅か一年半でご逝去なされて、夫婦生活は長く続かなったが、それでも私は徳川の人間として生きる道を選んだ。薩摩からは、こちらに戻ってきてほしいという書状が何度も届いたが、私は家定公の妻。薩摩に帰るなど、考えにも及ばなかった。徳川の人間として生きることを決めたのは、私だけではない。静寛院様とて、同じであろう」

瀧山「静寛院様も、元は京の都に許嫁のお方がおられました。それを、公武合体で家茂公の御台様としてお迎えすることになって……。静寛院様も、家茂公と仲睦まじいご夫婦であったのは、たったの数年でございましたね」

天璋院「はかないものじゃな……」

瀧山「その許嫁のお方も、今や薩長と手を組む朝廷の公家の一人。かつて思うていたお方と、敵同士になってしまうことがどれほどお辛いか。天璋院様とて同じでございま

しょう。薩長軍を仕切っているのは、薩摩の者で、天璋院様とも縁があるとか」

天璋院「私とて、故郷の者と敵同士となり、戦うことなど本意ではない。それ故に、私も静寛院様も、嘆願の書状を出したのじゃ。まだ返事は届いておらぬが……」

瀧山「戦となれば、血も涙もないのでございましょう。天璋院様がお城におられることを分かっておりながら……。時に男は、残酷なことも平気でするのでございます」

天璋院「それでも私は、信じようと思う」

瀧山「信じる？」

天璋院「鬼でもなければ蛇でもない。薩長軍や朝廷に、まだ私たちを思う気持ちがあるならば、この戦、止めることもできるやもしれぬ」

瀧山「敵に恩情をかける者なんぞおりましょうや。薩長や朝廷だけではなく、大奥とて同じことが言えましょう」

天璋院「瀧山……」

瀧山「私は、御鉄砲百人組の娘に生まれ、大奥に奉公したのは十四歳の時でございました。今年でちょうど五十年になります。十二代・家慶公の元に仕え、その後、お世継ぎであった家定公付きの御年寄となり、家定公が将軍職を継がれたのを機に、筆頭御年寄となりました。しかし、私より先に御年寄となっていたのが波路殿です。波路殿は、自分を差し置いて筆頭御年寄になった私のことが、今も今とて気に入らぬのございましょう。そうでなければ、毒を盛られるようなことにはなりませぬ。実成院様が大奥入りをされて間もなく、毎晩の御酒を控えるようにお伝えした時は、実成院様付きの女中たちが、私の御膳に毒を盛ったり、部屋に火を放たれたこともございました。それでも私は、この徳川や大奥の未来永劫のためを思うて、辛抱してまいりましたし、どのようなことでも耐えることができました。しかし、今のこの大奥には、も

はや未来など皆無。それ故に、職を退こうと思うたのでございます」

天璋院「そなた、五十年も大奥に尽くしてきたのじゃな。数多の嫌がらせも、じっと耐えてきて……。それらは全て、そなたがこの大奥を守りたいと思うたからであろう」

瀧山「私とて、もう若うはございませぬ。可愛がっていただいた当時の御年寄の方々を、幾人も見送りました。いずれ私も、見送られる側になるものだと思うておりました。まさか大奥が戦火の中に消えていくなど、誰が思いましょうや。消え失せていく大奥を見届ける道理がございませぬ」

天璋院「筆頭御年寄の職を退いたとして、そなたはどうするつもりじゃ」

瀧山「……」

天璋院「もしや……そなた、死ぬつもりではないのか……」

瀧山「……」

天璋院「（駆け寄って）それだけはならぬッ

……。瀧山、死ぬことだけは、この私が許さぬッ……」

瀧山「……」

天璋院「今日まで私が大奥におられたのは、そなたがいたからじゃ。将軍継嗣をめぐっては、私が一橋派で、そなたら大奥の者たちは紀州派と、争うたこともあった。されど家定公が亡くなってからというもの、公武合体で幕府が混乱する中、公家と武家で分裂しながらも大奥を束ねたのは、誰でもない、瀧山そなたではないか。将軍生母であった実成院様、天皇家からお輿入れされた静寛院様とその亡きお母上勧行院様、先代将軍生母の本寿院様、そして大御台所であった私。この五人が同じ大奥で暮らすなど、公武合体と同じぐらい混乱する出来事であった。特に本寿院様と実成院様の言い分は強く、私ですら八方塞がりであったというのに、瀧山は何事もなく言い分を受け入れ、事態を落ち着かせたではないか。あ

れは、そなたの裁量無しではできぬことであったと、私は思うておる」

瀧山「……」

天璋院「今の大奥は、そなた無しでは成り立たぬ。確かに御年寄は、そなた以外にも、波路や、私付きの幾島、実成院様付きの藤野など、他に幾人もおるが、この大奥の先陣を切ることができるのは、そなたしか……そなたより他おらぬ」

瀧山「……」

天璋院「瀧山あってこその大奥。退いて、自害することなど、私が決して許さぬ」

瀧山「私は、大奥と共に生きてまいりました。その大奥の権威は、もはや無きに等しく、私の役目はもう終わったものだと感じております。今、自害したとして、何の悔いもございませぬ。大奥を薩長軍に壊されるのであれば、せめて私は、その光景を見ずに果てとうございます」

天璋院「何を言うッ……。瀧山、私はそなた

に支えられて、ここまで来たのじゃ。輿入れして間もなくの頃、大奥のしきたりに異を唱え、そなたを困らせたことがあった。その時そなた、私に言うたではないか。徳川に嫁がれた以上、将軍家の御台所としての自覚をお持ちくださいませと。そなたに諭されたおかげで、私は徳川の人間として生きる覚悟を持つことができたのじゃ。それに、静寛院様やお付きの女官にも申しておったな。将軍家に嫁がれたうえは、天皇家の皇女としてではなく、御台所としてのお振舞いをされますようにと。相手が例え私や静寛院様という将軍家の御台所であろうと、はっきりと物申すそなたの姿は、まさしく威厳のある御年寄であり、大奥のおなごたちの鑑でもある。今は上様も御台様もこの城になく、御鈴廊下の鈴の音も鳴りやんでしまったが、それでもまだ、この大奥は生きておる。そなたが、そなた自身の手で、大奥を生かすのじゃ。生かさねば

ならぬ……。この徳川家のために、それができるのは、大奥……いや、この世であった一人、瀧山、そなたしかおらぬ」

瀧山「……」

天璋院「そなたは大奥の柱じゃ。柱が崩れたとき、この大奥は崩れ壊れるであろう。じゃが、瀧山という柱は、芯の通った太い柱で、決して折れたり壊れたりはせぬもの。まして、どれだけ切ろうとしても、傷一つつかぬ丈夫な柱。これほどの柱が、他にあろうか。あるものならば、この目で見てみたいものぞ」

瀧山「……」

天璋院「（頭を下げ）瀧山、この通りじゃ。大奥筆頭御年寄として、とどまってくれ」

瀧山「お顔を……お顔をお上げくださいませ」

天璋院「……」

瀧山「私は、天璋院様が思われるような柱ではございませぬ。大奥にはまだ、幾人ものおなごがおります。私一人いなくなったと

て、何も変わりますまい。その時は、その時。なるようにしかならぬのが、時の流れというものにございましょう」

天璋院「そなたはこれまで、徳川に尽くしてきた。それは私だけではなく、この大奥におるおなごが皆知っておる。逃げることが正しいこととてあるやもしれぬが、逃げることは決して恥ではない。されど瀧山、逃げるべきは今ではないのじゃ。今逃げることは、大奥にとって一番の恥ぞ。それに、大奥筆頭御年寄が職を退き、自害した話を薩長軍が耳にすれば何とする。江戸市中でも広まることであろう。そうなれば間違いなく、そなたは自害した後も、世間の笑い者になろう。私は、例え大奥が無くなることになっても、そなたを笑い者として世に晒しとうはない」

瀧山「……」

天璋院「それに、あの世においても、家定公や家茂公が、そなたを許すとは思えぬ」

瀧山「……」

天璋院「そなたは私に、徳川将軍家の御台所としての自覚を持てと言うたな。されば私も、そなたに申したいことがある。大奥筆頭御年寄としての誇りをもつのじゃ。そなたが誇りをもった姿となれば、大奥のおなごたちはついてくるであろう。今のそなたに足りぬのは、自信と誇りじゃ。あの頃の瀧山に戻ってはくれぬか。どこへ行ってしまったのじゃ……かつての瀧山は」

瀧山「……あの頃の私は、もうおりませぬ」

天璋院「ならば連れ戻すまでじゃッ……。かつての瀧山は、まだ生きておる。決して死んではおらぬ」

瀧山「……」

天璋院「戻ってきてくれ、瀧山。輝かしきあの頃の姿を、もう一度みせてくれ。今からでも、あの頃の姿に返り咲くことはできる。この混沌とした大奥を束ねることができるのは、そなたしかおらぬ」

瀧山「天璋院様……」
天璋院「ただ引き留めたくて言うてるのではない。そなたには、そなたらしゅう生きてほしいのじゃ」
瀧山「私……らしい……」
天璋院「そなたと私は、母と子ほど歳が離れておる故、偉そうなことを言うのは、ある意味おこがましいことやもしれぬが、そなたも徳川の人間のようなものではないか。なればこれからも、徳川の人間として、私と共に生きてほしい。まだ大奥は死んでおらぬ。これから、そなたらしい大奥を創り上げるのじゃ。私とて、そなたのためならば何も惜しまぬ。大奥と共に、これからも生きてくれ」
瀧山「今の私に、大奥と共に生きることなど、できましょうや……」
天璋院「できる。そなたがいない大奥など、もはや屍と同じぞ」
瀧山「これはまた、異なことを仰せられます

るな……」

天璋院「私は、誠のことを申したまでのこと。それに言うなれば、筆頭御年寄の座を退くそなたもまた、もはや屍同然ではないか」

瀧山「……」

天璋院「私は、屍となったそなたを見とうはない。まして自害して果てる姿もな。見たいものは、ただ一つ。大奥のおなごたちを束ね、大奥を共に生きる瀧山の姿じゃ。これは、何にも代えがたく、誰にも真似できぬこと。これからの大奥を創り上げていくことができるのは、この世でたった一人、瀧山そなただけじゃ」

瀧山「天璋院様……。私、今日ほど、決して忘れぬ日はございませぬ。私にとって、生まれ変わる日になったと、そう思うておりまする」

天璋院「瀧山……では、そなた……」

瀧山「これまでの瀧山は、もうこの世にはおりませぬ。一度死に、生まれ変わったので

ございます。大奥の運命と共に生きていく

瀧山に」

天璋院「そうじゃ。そなたは生まれ変わったのじゃ。これからは、新たな心積もりで、筆頭御年寄としての職を全うするのじゃ」

瀧山「これまでのことは、長い夢を見ていたと思うことに致します。済んでしまったことは、もはや後戻りはできませぬ。前を向き、これからの大奥を考えて、生きていきます。それが、今の私にできる最善の方法かと……」

天璋院「左様。この大奥が、そなたを生かしているのではない。そなたが、大奥を生かしているのじゃ。そなたの手によって生かされているからこそ、今の大奥がある。これからもな」

瀧山「そのようなこと……」

天璋院「この大奥を生かし、大奥と共に生きていくことは、言わば共存。瀧山、今やそなた自身が、大奥そのものと言っても過言

ではなかろう」

瀧山「私が、大奥自身……」

天璋院「大奥と共に生きることが、そなたの運命なのじゃ。私が徳川に嫁いだことも、それもまた運命と言うもの」

瀧山「運命とは、時に惨いことでございますな」

天璋院「されど、運命は変えれるもの。ならば、運命をどのように生きていくかを考えねばならぬ」

瀧山「左様でございますな……」

天璋院「私は、郷の養父・斉彬公の養女となった時から、運命が決まっていたと思うておったが、そもそも島津家の娘に生まれたことが、私の運命だったのやもしれぬ」

瀧山「となれば、人は皆、この世に生を受けたことそのものが、運命なのやもしれませぬな」

天璋院「子は天からの授かりものと言うからの。人は、何かの運命を背負って生きてお

るのじゃ。それが武士であろうが、町人であろうが、商人であろうが、百姓であろうが……」

瀧山「何とも不思議なものでございますな」

天璋院「そなたが大奥に奉公し、家定公の御年寄となり、そして筆頭御年寄となったのも運命なのであろう。私が輿入れの際、もし筆頭御年寄がそなたでなかったら、今頃どうなっていたであろうか。それに、家定公が未だご健在だったら、静寛院様が家茂公ではなく、京の許嫁のお方と一緒になっていたら……。そう思うと、人の人生というのは、まさに運命に左右されているのであろう」

瀧山「私も、御年寄になっていなければ、大奥ではまた違う暮らしが待っていたのやもしれませぬな」

天璋院「そなたのような才覚をもったおなごを、そのままにするわけがなかろう。私がもしそなたよりも先に大奥に入ったおな

ごであれば、間違いなく御年寄に取り立てたであろうな」

瀧山「勿体なきお言葉にございます」

天璋院「これからも、そなたの大奥での生き様を見届けようぞ。良いな、大奥筆頭御年寄、瀧山」

瀧山「この瀧山、命に替えましても、大奥と共に生き、大奥を守ってみせまする」

深々と平伏する瀧山――大きく頷く天璋院。

○長屋・清六の部屋

清六が傘貼りをしている――が、何か考えている様子で、手が進まない。と、おくにがお茶を運んでくる。

おくに「どうしたんだい？」

清六「源太さんに続いて、おゆうちゃんまで死んじまうなんてな……」

おくに「二人とも、まだ若いのに……」

清六「もう会えねえんだな、あの兄妹に」

おくに「……」

清六「お天道様は、一体何を見てやがるんだい。何もあんな若い二人の命、奪うことなんてねえのによ」

おくに「この長屋も静かになっちまったよね。まあおゆうちゃんが大奥に上がる前は、源太さんも元気で、賑やかだったのにね」

清六「贅沢なんてできねえのに、俺の傘も買ってくれてよ」

おくに「そうだったね……」

と、与作が入ってくる。

与作「ごめんよ。売れ残りなんだけど、猫の餌にやるのも勿体ねえと思って、持ってきた」

おくに「いつもすまないね」

与平「（清六を見て）どうしたんだい？」

おくに「源太さんとおゆうちゃんのことでね」

与平「兄妹で肩寄せ合って生きてきたのに、こんなことになっちまうなんてな……」

清六「……」

おくに「これからだって時に、後を追うようにおゆうちゃんまで……」

与作「今頃、あの世で兄妹仲良くしてんじゃねえかな。俺たちのことも見守ってくれてるよ、きっと」

おくに「そうだね……」

清六「……」

与作「（笑って見せて）清六さん、お前さんがそんな湿っぽい顔してたら、源太さんもおゆうちゃんも安心して成仏なんぞ、できやしねえよ」

おくに「そうだよ、お前さん」

清六「……」

おくに「私らが元気な姿を見せてあげることが、あの子たちにとっての冥土の土産になるんだよ」

与作「清六さん」

清六「……墓参りにでも、行くか。（とできあがった傘を手にすると）傘の一本も供えてやらねえとな」

おくに「お前さん……」

清六、傘貼りの手を進めていく――顔を見合わせて、清六の姿を見守るおくにと与作。

○江戸薩摩藩邸・中庭

薩摩藩士・海江田信義が、藩士たちに指示をしながら、軍勢の準備をしている。

海江田「鉄砲の弾は、もっと多く用意するでごわす。それでは足りん」

と、薩摩藩士・西郷吉之助がやってくる。

海江田「西郷さん。鉄砲以外にも、槍は刀も多く支度しもしたが、それで良いでごわすか？」

西郷「武器は抜かりなく、支度するように」

海江田「ところで西郷さん。大奥の天璋院様からの書状は、ご覧になったでごわすか？」

西郷「ああ。慶喜公の命をお救いくださいと

いうことじゃった」

海江田「そうでごわすか……」

西郷「慶喜の首級を上げねば、この国は変わりもはん。狙うは、慶喜の命、ただ一つでごわすッ」

大きく頷く海江田――覚悟の眼差しの西郷。

○江戸の街

建右衛門が走っている――風呂敷包を持った五助が後を追って走っている。

五助「旦那様、ちょっと待ってくださいよ」

建右衛門「（立ち止まって）何をもたもたしてるんだよ、ほら早くッ」

と、走っていく――息を切らしながら後を追っていく五助。

○両替処『和泉屋』・店

建右衛門と五助が入ってくる――打ち壊しに遭い、ボロボロになっている店

の様を見て絶句するふたり。

五助「これは……」

建右衛門「(奥に向かって)ごめんください、富橋屋でございます」

と、奥から権太夫が出てくる。

権太夫「おお、富橋屋の」

建右衛門「大事ございませぬか」

権太夫「いやいや、見ての通りの有様。とうとう、我が和泉屋も打ち壊しに」

建右衛門「お怪我は？」

権太夫「私は大丈夫でしたが、手代と丁稚が何人も。まあ、死人が出なかったのが、不幸中の幸いというもの」

建右衛門「左様で……」

五助「あの、旦那様」

建右衛門「おお、そうであった。(と五助から風呂敷包を蹴鳥)これは、ご注文の品でございましたが、私どもからの見舞いの品として、お受け取りください」

権太夫「しかし、このような高価なものを、

見舞いとして頂くなど……」
建右衛門「米や金に換えても、よろしいかと思います」
権太夫「かたじけのう存じます」
建右衛門「今は大変な時やもしれませんが、お気を確かにもたれて」
権太夫「富橋屋さんのご恩、和泉屋権太夫、忘れは致しませぬ」
建右衛門「もし何かお困りなら、この五助を遣わします故、遠慮なくお申しつけくださりませ」
権太夫「富橋屋さん……ありがとうございます……（と深々と頭を下げる）」

○江戸の街

建右衛門と五助が歩いている。

五助「打ち壊しって、あんなに酷いんですね」
建右衛門「まさか和泉屋さんまでもが……」
五助「あの様で打ち壊しとなると、江戸総攻めは、どうなるのでしょうね。もう、薩摩

のお侍たちが、江戸入りされたようですし」
建右衛門、思わず立ち止まる。
建右衛門「五助」
五助「へい？」
建右衛門「おめえは、おうめのことが心配か？」
五助「そりゃ、富橋屋の大事なお嬢さんですから。でも喜八さんのほうが、どれほどお嬢さんを心配なさっておいでか……」
建右衛門「そうだな……」
難しい顔で腕を組む建右衛門。

○呉服問屋『富橋屋』・母屋・一室
建右衛門とおあつが話している。
おあつ「おうめを、連れ戻せと仰るのですか？」
建右衛門「ああ……」
おあつ「しかし、おうめの好きなようにしたら良いと、あなた仰ったではありませんか……」

建右衛門「和泉屋さんの打ち壊しの様を見たら、どうも不安でな……。江戸総攻撃が、あれ以上のものと考えると、おうめのことが気がかりでな。むざむざと殺されでもしたら……」

おあつ「あなたッ……」

建右衛門「……」

おあつ「連れ戻せと申されましても、あの子が首を縦に振るかどうか……」

建右衛門「無理やりにでも連れ戻せ」

おあつ「そのようなご無体なことを。里帰りするには、お許しを得なければならぬのですよ」

建右衛門「そのようなこと言うてる時ではない。お前は、おうめが薩長の侍たちに殺されても良いって言うのか」

おあつ「何もそんなこと言ってないじゃありませんかッ……」

建右衛門「では、どうしたら良いッ……」

おあつ「大奥には、瀧山様がいらっしゃいま

す。あのお方は、大奥の女中たちを粗末に扱うようなお方ではございませぬ。だからこそ、おうめも瀧山様のお側に残ることを選ばれたのでございましょう。おうめは、無事であると、私は信じております」

建右衛門「……」

おあつ「今ここで、無理におうめを連れ戻したところで、おうめのためにはならぬでしょう。後悔するぐらいなら、気の済むまで瀧山様のお側にいさせてあげましょう。それで良いじゃありませんか」

建右衛門、不機嫌そうに出ていく――

憮然とした顔のおあつ。

○江戸城・大奥・静寛院の部屋

静寛院が琴を弾いている。側に控える女中たち。と、足音が聞こえ、瀧山が入ってくる。

瀧山「失礼いたします」

静寛院「（演奏を止めて）瀧山、如何した？」

瀧山「ただいま、京より土御門殿が帰城した由にございます」
静寛院「藤子がッ……？」
と、藤子が入ってくる。
藤子「ただいま、戻りましてございます」
静寛院、思わず藤子に駆け寄り、
静寛院「藤子……。よう……よう、無事に戻ってきてくれた」
藤子「宮さんの御為でごじゃりますれば……」
静寛院「長の道中、大儀であったな……」
藤子「宮さんのお気持ちを分かっていただくまでは、江戸には戻れぬと思い……。でも、良うございました。東海道先鋒総督の橋本さんや、朝廷の議定や参議の方々にも、宮さんの想い、お聞き届けくだしゃりました」
静寛院「誠か……」
藤子「謝罪の身があるなれば、徳川家の存続の可能性もあると、そう仰っておいででした」
静寛院「そうか……。まだ、望みはあるとい

うことじゃな」
藤子「はい」
瀧山「……静寛院様」
静寛院「何じゃ？」
瀧山「私に、考えがあるのですが……」
静寛院「……？」

○同・同・天璋院の部屋

天璋院と静寛院が上座に、瀧山が下座に座り話している。側に控える、染嶋、幾島、ませ、藤子、仲野、梅原、その他女中たち。

天璋院「大奥から、御触れを出す？」
瀧山「はい。徳川家中に対し、恭順の意を崩さぬようにとの御触れにございます。土御門殿が申し上げたように、朝廷は寛大な処置を取られる由。されば、家中に万一心得違いをし、恭順の意を失うような者があれば、朝廷に対しての顔向けもできず、家名断絶ともなりえましょう。そうならぬため

にも、恭順の意を失わぬことを、下々まで
徹底致さねばなりませぬ」
天璋院「しかし、大奥から令を発するなど、
未だかつて無いのではないか？」
瀧山「おそらく、過去に前例はございませぬ。
されど、今恭順の意を徹底致さねば、土御
門殿の上洛や、天璋院様や静寛院様のした
ためし書状、上様のご謹慎、何もかもが無
駄になりましょう。全ては、徳川を守るた
め。もはや、一刻の猶予もならぬかと」
静寛院「左様にございますな」
天璋院「瀧山。大奥の陣頭に立つのはそなた。
全ては、そなたに委ねる」
瀧山「承知致しました」
深々と平伏する瀧山。
N「三月八日、こうして徳川家中に対し、大
奥より下々に至るまで恭順を徹底させ、心
得違いのなきようにという御触れが出さ
れた。大奥発の法令が出されたことは、幕
府開府以来、おそらく初めてのことである

と言われている。徳川を守りたいという女たちの気持ちが合わさったうえでの、瀧山の判断であった」

○同・表・御広座敷

勝、尾田、青山が深刻そうに話し合いをしている。

尾田「では、我らは大奥に従えと申すか」

青山「瀧山殿、天璋院様、静寛院様を中心にお決めになったことだそうで」

勝「……」

尾田「じゃが、大奥から令が発せられるなど前代未聞。表の動きが分からぬおなごなんぞに、何ができよう」

青山「されど、恭順のを徹底し、姿として示すことが、今我らができることではございませぬか」

尾田「そなた、薩長が怖いのか？」

青山「そうではございませぬ。徳川を守りたいのは、大奥も我らも、志は同じかと」

尾田「大奥御留守居役は、いつから大奥のお
なごの機嫌取りをするようになった」
青山「尾田様ッ……」
勝「今、我らが争うておる場合ではない」
尾田「安房守殿。そなたは軍艦奉行。今、こ
の事態を見て、どう思うか？」
勝「私も、今は大人しく恭順の意に徹するこ
とが賢明かと」
尾田「そなたまで……」
勝「若狭守殿。あなた様は、大奥を下に見て
おいでかもしれませぬが、大奥こそ、徳川
の行く末を一番に考えておりましょう。静
寛院様はお付きの女官を入洛させ、天璋院
様はお郷の薩摩へ嘆願の書状をお書きに
なり、それを踏まえて瀧山殿は御触れを出
した。今、我らが恭順の意を示さず、まし
てや戦支度などすれば、徳川の存続はおろ
か、上野寛永寺にてご謹慎中の上様のお命
とて危うくなりましょう。我らの主君は、
上様にございますぞ。上様のお命を助けま

いらせたくあれば、まずは若狭守様が、その言動をお慎みなさるがよろしかろう」

尾田「おのれ……（と憤然と去っていく）」

青山「これで、よろしいのでございましょうか？」

勝「自信を持たれませ、青山殿。あなた様のお考えは、間違っておりませぬ」

難しい顔の青山。

○同・庭園

波路と尾田が密談している。

波路「尾田様、もう私は我慢できませぬ。これまで、あなた様の仰るように動いてきましたが、もはやこれまでではございませぬか……」

尾田「落ち着かれよ、波路殿。大奥よりの御触れは、我ら表も知らなかったことじゃ」

波路「しかし、このままでは……」

尾田「御触れとは言うても、それは所詮大奥より出されしもの。大したことにはなるま

い。大奥の女ごときに、何ができよう」
波路「女ごとき……？　尾田様は、大奥のおなごたちを、そのように見ておられたのですか？　私が狙う筆頭御年寄は、表の老中とは対等でございましょう。それ故、あなた様に従い、瀧山様のお命を狙うように仕向けたというのに……」
尾田「異なことを申されますな」
波路「尾田様……」
尾田「老中と御年寄が対等など、聞き捨てならぬこと。大奥のおなごごときが、老中に意見申すなど、無礼千万じゃ」
波路「では、これまで私は一体何のために……。尾田様、あなた様の指図で全て動いたではありませぬか」
尾田「知らぬわ」
呆れ顔の波路。

○同・大奥・波路の部屋～中庭（夜）
雷が鳴っており、雨が強く降っている。

波路が苛立つように、常盤と話している。

波路「おのれ尾田め……。ここで、あの者に裏切られようとは……」

常盤「しかし、今事を荒立てるのは、ご無体というものでは……」

波路「そなたまで、瀧山に加勢するのか」

常盤「そうではございませぬ。瀧山様は、徳川家存続のために、家中に御触れを出したのでございます。今、朝廷や薩長の怒りを買うようなことをすれば、大奥はどうなりますことか……。苛立つお気持ちはよう分かりますが、どうかここは、ご辛抱あそばして……。今を耐えねば、波路様の夢は果かなくも散って消えてしまいましょう。そうならぬためにも、今はとにかく耐えて耐えて、耐え続けなければ……」

波路「恭順の意を通したところで、薩長の侍や朝廷が、素直になるとは思えぬ。所詮は、一時の時間稼ぎにしからぬであろう」

常盤「では、波路様は、どうされるおつもりなのです？」
波路「それは……」
常盤「やはり、筆頭御年寄は瀧山様でございますな」
波路「常盤、そなたまで裏切ると申すか」
常盤「あなた様は、ただ筆頭御年寄という権力が欲しかっただけ。しかし今の大奥では、権力や地位だけでは、大奥を守ることなどできる道理がございませぬ」
波路「……」
常盤「仮に波路様が筆頭御年寄になられたとしても、三日天下で終わりましょう」
波路「三日……天下とな……。（と怒りをこみあげ）そなたッ……」
と、懐剣を取り出し、常盤に襲い掛かる。
常盤「乱心されましたか、波路様」
と、波路をかわす――狂ったように刀を振り回し、常盤に切りかかろうとす

る。常盤、波路の手首をつかむ――なおも力づくで反抗する波路。
近くにあった真鍮やかんを投げつける常盤――熱湯がこぼれ、波路にかかり、悲鳴を上げてうずくまる。
隙を見て逃げ出す常盤――顔に火傷を負い、髪を振り乱して、常盤の足首を掴む波路。常盤、波路を蹴飛ばす。
そこへ、仲野が通りかかる――襖が勢いよく倒れ、波路と常盤が掴み合いなる。仲野、混乱しながらも止めに入ろうとするが、入る余地がない。
波路、常盤に馬乗りとなる――必死で抵抗する常盤。中庭に出て、お互いずぶ濡れになりがらも、もみ合いになる常盤と波路。二人とも泥まみれになる。
と、何かが刺さる鈍い音がして、波路が唸り声をあげる。ハッとする常盤が、自分の手元を見ると、波路の腹部に懐剣が突き刺さっている。

波路、その場に倒れ込む――呆然とその場に座り込む常盤。

仲野「常盤様。何があったのです？」

常盤「……」

雨と雷が、更に強くなっている。

○同・同・瀧山の部屋（夜）

雨と雷がおさまっている。

瀧山の前に平伏している常盤――側に控える染嶋、仲野、梅原。

瀧山「では、全ては波路殿と尾田殿が仕組んだことであったと」

常盤「はい……」

瀧山「波路殿の企みであることは、大方分かっていたが、まさか影で手を引いていたが老中筆頭の尾田殿であったとは」

常盤「私も、罪の一端を担いだ身。このうえは、どのようなご沙汰でも覚悟はできております。この場で、死をもって償わせていただきとう存じます」

瀧山「ならぬッ」
常盤「何故でございます……。訳をお聞かせくださいませ」
瀧山「これ以上私は、大奥で死人を出したくないのじゃ」
常盤「……」
瀧山「それだけではない。常盤、そなたは表の役人と交渉し物資の調達を行う表使というお役目のある身。今、そなたに死なれては、大奥が困る。大奥のために、粉骨砕身に努めることこそ、そなたの償いと言うものじゃ。生きて大奥に尽くすことが、今のそなたの大事なお役目であると心得よ。自害して果てるなど、逃げるも同然。そのようなこと、この瀧山が決して許さぬッ」
常盤「……」
瀧山「大奥のおなごとして、役目を果たすのじゃ。良いな、常盤」
返す言葉もなく、泣きながら頭を下げる常盤――じっと常盤を見つめる瀧山。

○同・同・長局の廊下

染嶋、仲野、梅原が歩いている。

仲野「常盤様のこと、これでよろしかったのでございましょうか」

染嶋「瀧山様には、瀧山様のお考えがあってのこと。我らが口を出すことではない」

仲野「しかし、瀧山様のお命を狙うたお方。私なら、到底許すことなぞできませぬ」

梅原「仲野殿……」

染嶋「村瀬殿のことも、気にしておいでなのじゃ、瀧山様は」

仲野「……」

染嶋「瀧山様は村瀬殿を妹のように気にかけておられた。御三の間に勤めていた村瀬殿を、機転の利くおなご故と中臈に取り立てられてな。しかし、どこで道を踏み間違えたのか、村瀬殿はあのようなことに……。それ故、瀧山様はこれ以上、大奥の中でむざむざと死んでいく者を見たくないとい

う思いが、ひとしお強くなられたのであろう。私も、長年瀧山様のお側でお仕えしておる故、ようお気持ちが分かるのじゃ」

梅原「……」

仲野「……」

染嶋「私たちは、主人である瀧山様に従うまで。歳であろうが、血縁だろうが関係ない。以後、常盤殿のことは口にするでないぞ」

仲野「はい……」

うつむいている仲野――頷く染嶋。

○同・同・瀧山の部屋（夜）

瀧山がじっと座り、瞑想している――と、鶴岡が入ってくる。

鶴岡「よろしゅうございましょうか」

瀧山「構わぬ」

鶴岡「先ほど表よりお遣いがあり、老中筆頭・尾田若狭守様が、ご切腹された由にございます」

瀧山「そうか……」

鶴岡「……驚かれぬのでございますか？」
瀧山「波路殿を裏で操っていたのは、尾田殿であったそうじゃ」
鶴岡「……！」
瀧山「その波路殿も、先刻果てた……」
鶴岡「何と……」
瀧山「常盤に切りかかろうとして、逆に命を落とした」
鶴岡「左様で……」
瀧山「ほんに大奥とは、恐ろしい伏魔殿じゃな……」
鶴岡「瀧山様……」
瀧山「そなたとて、そう思うであろう」
鶴岡「私も、大奥で生きてきた身でございます故、幾度もそう思いました。もしも娘が、大奥に奉公すると申したら、反対するやもしれませぬ」
瀧山「これ以上、誰も死なせとうはない……」
鶴岡「……」
大きく溜息をつく瀧山。

○同・同・天璋院の部屋（翌）

天璋院が書状を箱にしまっている――

その様子を見ている幾島、ませ、その

他女中たち。

天璋院「のう、幾島」

幾島「はい」

天璋院「薩摩への書状、直接、西郷の元へ届

けてはくれぬか」

思わず顔を見合わせる幾島とませ。

幾島「私が……でございますか」

天璋院「私やそなたと西郷は、薩摩にいた頃

よりの仲。それに西郷は、亡き養父・斉彬

公の命を受け、私の婚礼道具を調達した者

じゃ。大奥とも縁があるというもの。私の

使いとして、この書状を西郷に届け、あの

者に私の想いを伝えてほしいのじゃ」

幾島「おそれながら……今の西郷は、もはや

薩摩にいた頃の男ではございませぬ」

天璋院「幾島……」

幾島「ようお考えくださいませ。今西郷がしようとしていることは、天璋院様のお命を奪うことも同じこと。そのような裏切り者に、何故そこまで……」

ませ「……」

天璋院「……」

幾島「私は、天璋院様が何度も書状を書き直していたことは存じ上げております。その行動には、頭の下がる思いです。しかし、天璋院様のお気持ちなど、西郷に分かるはずがございませぬ。薩摩から何の返事も来ぬことが、何よりの証拠でございましょう」

天璋院「幾島の申すことも、一理あるやもしれぬ。されど私は、それでも西郷に私の想いを知ってほしい。最後まで諦めたくないのじゃ」

幾島「……」

天璋院「そなたの手にかかっておる。幾島、どうかこの書状を、西郷に……」

幾島「……」

ませ「幾島様。どうか、天璋院様のお気持ち
をおくみいただいて……」
天璋院「頼む、幾島……」
幾島「……承知いたしました。天璋院様のた
め、私、西郷の元へ参ります……」
天璋院「ありがとう……幾島……」
幾島、黙ったまま平伏する。

○同・同・千鳥の間
瀧山と藤野が話している。
瀧山「そうか。実成院様は、無事に快方に向
かわれておられるか」
藤野「はい。御酒を控えられたのが、一番の
薬となったのでございましょう」
瀧山「酒は、たしなむぐらいが丁度良い。そ
れに、すっかり静寛院様との仲も良くなら
れたとか」
藤野「このような事態の中で、お互いに徳川
の人間として生きる覚悟が見えたのでご
ざいましょう。何とも皮肉なことではあり

ますが……」

瀧山「あとは、天璋院様と本寿院様じゃな。嫁と姑は、いつの時代も難しいものよ」

と、ませが入ってくる。

ませ「失礼致します」

瀧山「ませか？　如何したのじゃ」

ませ「先ほど幾島様が、江戸の薩摩藩邸に出立なされましてございます」

瀧山「幾島殿が……？」

藤野「何故、そのような……」

ませ「天璋院様のお使者として、書状をお持ちになられました。薩長の陣頭指揮を執る西郷という薩摩藩士にお会いになるとか」

瀧山「ああ……天璋院様や幾島殿が、薩摩にいた頃より懇意にしていた者か……」

藤野「恭順の意に徹する今、大丈夫でございましょうか……」

瀧山、何か思いついたように勢いよく立ち上がる――呆気に取られる藤野とませ。

○江戸薩摩藩邸・一室

幾島が微動だにせず、じっと待っている――と、そこへ、西郷が入ってくる。

幾島、平伏して迎える。

西郷「お久しぶりでございもす。お変わりなく、お元気そうで」

幾島「そなた……いえ、西郷殿も、ご立派になられて……。亡きお殿様にも、見ていただきたいものじゃ」

西郷「……」

幾島「本日は、天璋院様よりの書状をお持ち致しました」

と、書状の箱を西郷に差し出す。

西郷「……」

幾島「どうか、天璋院様のお気持ちをお分かり頂きたく存じます」

西郷「……」

幾島「私は、天璋院様よりの使者として来た身なれば、これをお読み頂き、天璋院様の

想いをお分かり頂くまでは、大奥に戻るわけは参りませぬ」

と、じっと西郷の目を見つめる――西郷、諦めたように箱を開けて、天璋院からの書状を読み始める。

天璋院の書状の声が流れる。

天璋院の声「西郷殿　徳川家存亡のこと、今一度考えて頂く候。共に薩摩で育った身なれど、徳川に嫁いだうえは、徳川の人間として生きていくつもりでござ候。私の存命中に徳川に万一のことあれば、冥土において家定公に対して面目がなく、日夜寝食も取れぬ日が続き候。大奥より徳川家中においては、朝廷に対しての恭順の意を徹するよう御触れを発し奉り候なれば、徳川の家名と慶喜公の命をお守り頂きたく候。私は西郷殿の調達による輿入れ道具にて徳川に嫁いだ身なれば、薩摩と徳川が敵となり、戦になれしことは誠に悲しき候。慶喜公を次期将軍にと、同じ志であったが故に、運

命とは惨いものであると思いし候。亡き養父斉彬公も、草葉の陰で嘆き悲しまれて思いし候。慶喜公の処分は如何様に致せしなれど、重ねて慶喜公の命はお救い頂きたく、お願いしたく候。私の命に替えても、徳川を守りたく候なれば、徳川の家名に傷をつけるようなことを致せし時は、冥土にてそなたをお恨みし候。命は尊きものなれば、決して粗末に扱わぬよう申し候。私とて、薩摩の血を引く薩摩御御女なれば、そなたとの争いは決して望まぬ候。薩摩のため、徳川のためにも、この争いが誠正しきことか、今一度考えて頂きたく候。私の胸中をお察しいただき、戦を止めて頂くよう、重ねてお願い申し上げ候。江戸城を戦火にすることは誠悲しきことなれば、そなたの中に今なお眠る情や仏心で、私の願いを聞き届けて頂きたく候。天璋院」

書状を抱え込みながら涙を流している西郷――見守るように見ている幾島、

それへ、

幾島「西郷殿。天璋院様は、このような戦を望んではおられませぬ。天璋院様が、どのような心中で、その書状をお書きになられたか……」

西郷「おいどんとて、天璋院様のお命を取るようなことは致しもはん。これまで、天璋院様が徳川と薩摩に挟まれ、どれだけのご苦労をされたか……。されど、こうなったのも全て、逆賊慶喜のせい……憎き慶喜が、火種にございましょう」

幾島「（涙を堪え、怒りを抑えながら）何を言われる西郷殿ッ……。慶喜公を逆賊呼ばわりするなど……。仮にも我らは、志を共にして、慶喜公を将軍に推挙するよう支え合った仲ではございませぬか」

西郷「慶喜が生きている以上、この国は変わらぬのでごわす。そんために、徳川は亡きものにせねばならんのでごわすッ」

幾島「では、天璋院様のお気持ちを無碍にさ

れるおつもりかッ……。天璋院様が、今回の江戸総攻撃の陣頭指揮をそなたが執っていることをお知りあそばされた時、どれほどお心を痛められたか……。それでも、戦をすると言われるのか」

と、海江田が走ってやってくる。

海江田「西郷殿、御客人が見えております」

西郷「今は会えぬ」

と、瀧山の声がする。

瀧山の声「いえ、お目通りいただきまする」

と、勝を従えた瀧山が入ってくる。

西郷「（勝を見て）勝さん」

勝「お久しぶりでございますな、西郷さん」

西郷「（瀧山を見て勝に）このおなごは？」

瀧山、西郷の前で三つ指を立てると、

瀧山「大奥筆頭御年寄、瀧山にございます」

西郷「（驚いて）大奥の……」

瀧山「西郷殿。あなたが、天璋院様や幾島殿と薩摩の頃より親しい関係であることは聞き及んでおりまする。本日は、幾島殿が

薩摩藩邸に向かわれたことを耳に致し、矢も楯もたまらず、勝殿と参上した次第にございます」

西郷「……」

瀧山「西郷殿、あなたは江戸総攻めのために、お城も江戸の街も、戦火にされるおつもりやもしれませぬが、そのようなこと、私が許しませぬ」

西郷「私は大奥筆頭御年寄として、大奥に仕えるおなごたちの命を守らねばなりませぬ。無論、天璋院様のお命も。私は、十四歳の頃より大奥に努め、もう五十年になります。もはや、お城に主のない今となっては、お城はあってないようなものでしょう。されど、大奥に奉公するおなごたちは皆、それぞれに生きていかなければならぬのです。何の罪もないおなごたちを、ここで見殺しにするわけにはまいらぬのです。あなたが求めるものは、何なのです？　幕府の権力ですか。それとも、上様のお命です

か。この戦に、一体何の意味があるのです」

西郷「……」

瀧山「天下泰平であった江戸を戦火にしたとき、一体いくつの尊き命が失われることになりましょう。江戸市中の人々には、何の関わりもないこと。いくつもの命を軽々しゅう扱うてまで、薩摩の亡き島津様は、あなたに新しい国を作ろうとすることを望んでおられるのでしょうか。西郷殿、今のあなたのその振舞いが、誠正しきことか、ようお考えくださいませ」

と、深々と頭を下げる。

幾島「西郷殿……」

西郷「……」

勝「瀧山殿、幾島殿。ここは一つ、私にお任せいただけませぬか？」

訝しそうに顔を見合わせる瀧山と幾島。

勝、笑顔で頷く――瀧山と幾島、ゆっくり立ち上がると、控えの間に向かう。

一度立ち止まり、勝に振り向く瀧山―

―ゆっくり頷く勝。
瀧山と幾島、控えの間で待機する――
襖が閉まり、勝が西郷と相対する。一
礼して去っていく海江田。
勝「男同士、腹を割ってお話しますか」
西郷「勝さん……戦において、一番強きは、
おなごなのやもしれませんな」
勝「（笑って）左様でございますな。特に、
大奥のおなごたちは」
西郷「天璋院様は、薩摩におられた頃より、
それは強きお方にございもした。薩摩御御
女とは、ああいうお方のことでごわす」
勝「薩摩御御女？」
西郷「優しくも、芯のあるおなごという意味
でごわす」
勝「まさしく、天璋院様のことでございます
な」
西郷「そん言葉は、天璋院様ためにあるよう
なもの」
勝「その天璋院様や、天皇家の血を引く静寛

院様をも巻き込んでも、江戸総攻撃をされるおつもりにございますか？」

西郷「……」

勝「天璋院様や静寛院様の安全を図らなければならぬかと存じます。有栖川宮様とて、かつて許嫁であった静寛院様のお命を失うとでまで、江戸総攻撃を望んでおられるとは思えませぬ。よく、お考えいだきますように」

難しく考え込んでいる西郷―控えの間でじっと待っている瀧山と幾島。

○江戸城・大奥・天璋院の部屋（夜）

天璋院と幾島が話している。

天璋院「そうか。勝と瀧山が……」

幾島「西郷が、慶喜公を逆賊と申された時、この場で西郷を刺してやろうとも思いました……。すっかり西郷も変わってしまったのです」

天璋院「西郷が、そのようなことを……」

幾島「はい……」
天璋院「西郷の様子は、他に如何であった？」
幾島「天璋院様の書状を読まれて、涙を流しておりました。慶喜公を逆賊と申したのは本心なれど、せめて江戸総攻めへの気が変わってくれると良いのですが……」
天璋院「勝と西郷は、明日もまた対面するそうじゃな」
幾島「はい」
天璋院「どうなるのであろうか……」

○江戸薩摩藩邸・一室（翌）

勝と西郷が会談している。

勝「西郷さん。昨日、瀧山殿も申しておりましたが、江戸を戦場にするのは無意味というもの。町人には関わりのないこと故、戦を止めて頂くわけにはまいりませぬか」
西郷「……」
勝「何か、条件があるならば、申していただきたい」

西郷「おいどんも、一晩考えもした。それで、薩長からは、以下の条件を考えもした。一つ、江戸城明け渡し。一つ、軍艦及び兵器の引き返し。一つ、慶喜公は故郷水戸にて謹慎。一つ、慶喜公に味方せし大名には寛大な処分。以上でございます」

勝「では、江戸城総攻撃は……」

西郷「そっく、取りやめでございもす」

勝「西郷さん……」

西郷「目が覚めもした。天璋院様や静寛院様のことを考えもすと、我らと縁のあるお方の命を危うくしては、新しい国なんぞ作れる道理がありもはん。おなごの芯の強さ、身に染みもした。勝さん、礼を言います」

勝「こちらこそ……」

安堵の溜息をつく勝――その目には涙が浮かんでいる。

N「この二日に渡る勝と西郷の談話により、江戸城総攻撃は中止となった。それは三月十四日。総攻撃を翌日に控えての出来事で

あった」

○江戸の街

龍三が瓦版を持ちながら、読み上げている――町人が集まっている。

龍三「江戸市中を騒がせた薩長軍による江戸城総攻めの中心が決まった。何と薩長軍の心を動かしたのは、軍艦奉行の勝様と、大奥のおなごたち。事の顛末を知りたきゃ、さあ買った買った。今なら三文だよッ」

群がって、瓦版を買っていく町人たち。

○呉服問屋『富橋屋』・店

おあつ、喜八、五助、その他手代や女中たちが働いている――と、そこへ、瓦版を持った権太夫が息を切らしながら駆け込んでくる。

権太夫「建右衛門さん、いるかねッ……」

おあつ「和泉屋の大旦那、どうなさったんですか？　（と奥に向かって）あなたッ、あ

なたッ……」

と、建右衛門が入ってくる。

建右衛門「どうしたんだよ。（と権太夫に気づき）おや、和泉屋の大旦那、いらしてたんですか」

権太夫「（瓦版を渡して）これを見ておくれ」

建右衛門、瓦版を読み始める。

おあつ「五助、和泉屋さんにお水を」

五助「へい（と奥へ行く）」

建右衛門「江戸城総攻めが、中止ッ……？」

喜八「え……？」

おあつ「中止ってことは、おうめは助かるということですね」

建右衛門「（瓦版を見ながら）薩長軍の出した条件に、城を明け渡すと書いてある」

喜八「では、お嬢さんは戻ってくるということですか」

おあつ「そういうことになるね。でも、城を明け渡すとなると、大奥勤めしてる他の人たちは、一体どうなるんだろうね……」

建右衛門「おうめも、帰ってくるとは限らんぞ」

難しい顔のおあつ。

○江戸城・大奥・大広間

大奥女中一同が揃っている。その中にいる染嶋、仲野、梅原、幾島、ませ、藤野、藤子、常盤、鶴岡――瀧山が話している。

瀧山「皆に申し渡す。江戸城総攻めは、中止となった。されど、薩長軍による総攻め中止の条件として、この城を明け渡すこととあいなった。これまで、この大奥に仕えてくれたこと、瀧山、心より礼を申し上げる」

ざわつく女中たち。

幾島「静まれよ。瀧山様のお話は、まだ終わっておらぬ」

女中たちの会話が止まる。

瀧山「大奥はまもなく無くなる。この中には、帰る郷や身寄りのない者もおるであろう。

大奥を出ていった先のことは、最後の一人に至るまで、この瀧山が責任をもって取り計らう。これよりは、御目見え以上も、御目見え以下もない、遠慮なく申すが良い」

一同、平伏する。

○同・同・本寿院の部屋

本寿院と法好院が話している。

本寿院「城を明け渡す？」

法好院「はい……」

苛立ちながら煙管の用意をする本寿院。

法好院「江戸城総攻撃中止の条件として、城を明け渡すようにと……」

本寿院「（煙管を吸いながら）薩長の田舎侍が、そんな条件を出したというのか。我らを城から追い出すという、惨い条件を」

法好院「はい……」

本寿院「勝は、そんな条件を飲んだのか」

法好院「総攻めで数多の命を奪われることを思えば……」

本寿院「じゃが、城を追い出されては、我らに犬死にしろと言うてるも同然ではないか」

法好院「我らのことは、今瀧山様が……」

本寿院「この大奥も、おしまいか……」

溜息をつきながら煙管をふかす本寿院。

○同・同・長局の一室

常盤が、写経をしている――と、鶴岡が入ってくる。

鶴岡「よろしいか？」

常盤「鶴岡様」

鶴岡「写経にございますか」

常盤「ええ。心を落ち着かせようと思い。私に、何ぞご用で？」

鶴岡「（三つ指を立てて）常盤殿に、どうしても頼みがあるのです。密偵の弥平次に、至急調べて頂きたいことがあり、取り次いでほしいのです」

唖然としている常盤。

○同・同・瀧山の部屋（夜）

いくつもの書状や資料を見ながら書き物をしている瀧山。

N「その日から瀧山は、身寄りのない女中たちのために、奉公先や縁談の取り計らいを行い始めた。また、軍艦奉行の勝と話し合いながら、天璋院、静寛院、本寿院、実成院の預け先を決めることとなった」

○同・同・平川門

荷物を背負った女中たちが、ぞろぞろと去っていく。

N「二十日程が経ち、宿下がりや奉公先の決まった女中たちが、次々と名残惜しくも大奥を去っていった。僅かな女中たちしか残らなくなった大奥の活気は、少しずつ無くなっていったのである」

○同・同・本寿院の部屋

本寿院と天璋院が話している――側に
控える法好院と幾島。
天璋院「母上様。何故そのようなことを仰せ
られまする。城の明け渡しは、決まったこ
となのでございますよ」
本寿院「我らを城から追い出すなど、そなた
の郷の者は、相変わらず職人技のように卑
怯なことを企てる」
天璋院「……」
本寿院「何とも思わぬのか。薩摩は、そなた
を捨てたのじゃぞ」
幾島「本寿院様……」
本寿院「そうであろう。この江戸城に、天璋
院殿が住んでいることを分かっておきな
がら、総攻撃を仕掛け、いざ中止を決めた
と思えば、今度は城から出て行けと。見殺
しにしても何とも思わぬ、血も涙もない鬼
の集まりではないか」
天璋院「母上様。私は、もはや薩摩の人間で
はございませぬ。家定公の元に嫁いだ時よ

り、私は徳川の人間として生きる道を選びました」

法好院「本寿院様。幾島殿よりお聞きしたのですが、天璋院様が薩長軍の陣頭指揮を執る薩摩藩士宛てにしたためた書状、相手は涙したそうでございますよ。天璋院様の書状が、心を動かしたのでございます」

本寿院「薩摩の者がしたことじゃ。同じ郷の天璋院殿が尽力するのは当然のことじゃ。何も崇めたり、褒め称える必要などあるまい」

法好院「……」

天璋院「私のことは、何と言われようが構いませぬ。城を明け渡すことになろうとも、私は何も暮らす居所が大奥ではなくても良いと思うております。城を出るということは、もはや徳川将軍家が無くなることと同じこと。されど、この命ある限りは、徳川の人間として生きることに変わりはございませぬ。大奥や城にこだわらずとも良

いではございませぬか。形あるものは、いずれ無くなるのです」

本寿院「……」

天璋院「私と共に、新たな所で、また徳川の人間として生きるのも良いではございませぬか」

諦めたように溜息をつく本寿院――やり切れないように見つめる天璋院。

○同・同・長局の一室

鶴岡と常盤が、菓子を食べながら話している。

鶴岡「常盤殿、一つ伺うてもよろしいですか？」

常盤「はい？」

鶴岡「弥平次とは、どのような仲なのです」

常盤「私と弥平次は、幼き頃より姉弟のように、伊賀国で育ちました」

鶴岡「伊賀……もしや」

常盤「ええ。私も弥平次も、元は忍びの家柄

なのでございます。時の流れで、伊賀の忍びは消えましたが、それでも忍びの血を引く者故、私が大奥に上がり、表使の役職をお預かりするようになってから、弥平次を密偵として使うておりました」

鶴岡「左様でございましたか」

と、弥平次の声がする。

弥平次の声「弥平次にございます」

常盤「何とした？」

と、天井から弥平次が顔を出す。

弥平次「鶴岡様に頼まれていた旨、委細はこれに」

と、懐から紙を取り出す――鶴岡、手を伸ばして、紙を受け取り、読み始める。

鶴岡「そうであったか……」

安堵の笑みを浮かべる鶴岡。

○大工正吉の家・玄関

建右衛門がやってくる。

建右衛門「ごめんください」
と、おはるが奥から出てくる。
建右衛門「正吉さん、いるかね？」
おゆう「（奥に向かって）おばさんッ」
と、奥からおさとの声がする。
おさとの声「はーい」
と、おさとが出てくる。
おさと「あら。富橋屋の旦那。どうなさったんです？」
建右衛門「正吉さんに用があって来たんだけど」
おさと「もう帰ってくると思いますよ。よろしければ、中でお待ちになって」
建右衛門「ああ、それはありがたい」
おさと「さあ、どうぞ」

○同・一室
建右衛門が待っている――おさとがお茶を運んでくる。
おさと「少しお待ちいただいて」

建右衛門「かたじけない。そういえば、さっきの女の子は？」
おさと「うちの人の見習いをやってる長兵衛さんって人がいるんですけど、その娘なんです」
建右衛門「預かってるんですか？」
おさと「長兵衛さん、女房と別れちまったんですよ。父一人子一人だったところを、うちの人が見かねて」
建右衛門「そうでしたか」
と、玄関から正吉の声がする。
正吉の声「けえったよッ」
おさと「うちの人戻ってきました。すぐ呼んできますね」
と、出ていく――少し待っている建右衛門。と、正吉が入ってくる。
正吉「建右衛門さん」
建右衛門「正吉さん、しばらくだったね」
正吉「何かご用で？」
建右衛門「先立って、両替処の和泉屋さんが

打ち壊しにあったでしょ」
正吉「ああ。ありゃ、酷え話だった」
建右衛門「それでも和泉屋さんは、また店を立て直すおつもりらしくて、その修繕を、ぜひ正吉さんに頼めないかと思って」
正吉「俺なんかで、よろしいんですかい。和泉屋さんといえば、江戸で一番の両替処でやんすよ」
建右衛門「正吉さんの腕を見込んで頼んでるんですよ。お願いできませんか」
正吉「分かりやした。江戸っ子大工の正吉、この腕で、和泉屋さんの立て直し、させていただきます」
建右衛門「ありがとう。よろしく頼みますよ」
正吉「へいッ」

○江戸城・大奥・長局の一室

鶴岡が荷物をまとめている――辺りを寂しい顔で見回す。

○同・同・瀧山の部屋

鶴岡が入ってくる。

鶴岡「失礼致します」

迎える瀧山、染嶋、仲野、梅原。

瀧山「そうか。今日であったか」

鶴岡「大奥御客応答という役を仰せつかったこと、光栄に存じます」

瀧山「どうか、息災でな」

鶴岡「はい。大奥での日々、鶴岡、終生忘れることはございませぬ。瀧山様のもとでお仕えできたこと、生涯の宝と致します」

瀧山「そなたが御客応答で良かった……。これまで、よく仕えてくれた」

鶴岡「有難きお言葉に存じます」

瀧山「おお、そうであった。昨日大奥を去っていった常盤から、そなたに伝えてほしいと言われておったことがあってな」

鶴岡「何でございましょうか」

瀧山「最後に、鶴岡様のお役に立てて良かった、そう伝えてほしいと」

鶴岡「私も、常盤殿には感謝しております」
瀧山「何ぞあったのか？」
鶴岡「ええ、まあ（と笑ってごまかす）」
瀧山「行く当てはあるのか？」
鶴岡「はい」
瀧山「そなたのことは忘れぬ」
鶴岡「私もでございます」
　お互い見つめ合う瀧山と鶴岡。
鶴岡「これにて、永のお暇を頂戴いたします」
　と、三つ指を立てて深々と頭を下げる
　と、去っていく――その後ろ姿を見つ
　める瀧山。
瀧山「鶴岡も去り、常盤も密偵と共に故郷の
　伊賀へ帰り、残すは……（と梅原を見て）
　梅原、そなたか……」
梅原「私は、最後まで瀧山様のお側に……」
瀧山「何を言う。そなたには、継がねばなら
　ぬ店があるではないか。父上も母上も、そ
　なたを待っておる」
染嶋「そうじゃぞ、梅原。後のことは、私と

仲野に任せるのじゃ」
梅原「……」
仲野「梅原殿」
寂しい顔の梅原。

○大工正吉の家・玄関
紋付を着た正吉が出てくる――見送りに来ているおさと、長兵衛、おはる。
正吉「やっぱり紋付より、いつものほうが良いんじゃねえのか」
おさと「何言ってるんだよ。相手は、江戸一番の両替処だよ。上等な着物で挨拶に行かなくてどうするんだよ。私まで笑われることになるんだから」
正吉「けどよ……」
長兵衛「親方、慣れないかもしれませんが、今日はこれで辛抱していただいて」
正吉「他人事だと思いやがって、おめえは」
と、鶴岡が通りかかる――それに気づく超じぇえ。お互い、長くじっと見つ

め合う。

長兵衛「おみね……」

鶴岡「旦那様……」

と、思わず駆け寄る――不思議そうに見ているおはる、正吉、おさと。

鶴岡「江戸城を明け渡すことになって、大奥を出ることになったのです。それで、密偵に調べてもらったら、旦那様がこちらで大工の見習いをしているって……ここに来たら、会えると思って」

長兵衛「大奥に奉公すると言って姿消してから、なしのつぶてだったからな。薩長軍が江戸を攻めるって聞いた時、そなたがどうしてるかと思って、気が気じゃなかった……」

鶴岡「大奥に上がった時から、旦那様はおはるのことは忘れようと思って……生まれ変わったつもりで、大奥で勤めておりました」

と、おはるを見る。

長兵衛「大きくなっただろ、おはるだ」
感極まって泣き始める鶴岡。
長兵衛「(おはるに)お前のおっかさんだよ」
おはる「私の……おっかさん」
鶴岡「おはる……。こんなに大きくなって」
と、おはるを強く抱きしめる。
正吉「長兵衛。良かったじゃねえか、女房が戻ってきてくれて」
おさと「大奥に奉公してるなんて、私、ちっとも知らなかったよ」
長兵衛「仕官の当てがなく、毎日酒に溺れておりました。そんな私に愛想を尽かして、おみねは大奥に上がったんです」
おさと「そうだったのかい……」
鶴岡「あの時は、自分一人生きることに精一杯で……。まだ乳飲み子だったおはるを捨てることも、どれだけ辛かったか……」
正吉「けどこれで、また家族三人一緒になれるってわけだ」
おさと「そうだね、小間さん」

長兵衛「（鶴岡に）もう、侍には戻らない。
これからは、大工長兵衛として生きていく。
それでも良いか？」
鶴岡「旦那様とおはると一緒なら、どんなと
ころでもついていきます」
長兵衛「おみね……」
笑顔で頷く鶴岡。
正吉「あ、いけねえッ。和泉屋さん」
おさと「そうだった」
正吉「じゃ、行ってくるぞッ」
と、走って去っていく――見送るおさ
と、長兵衛、おはる、鶴岡。
おはるを真ん中に、長兵衛、鶴岡の三
人は手を繋いでいる。

○江戸城・大奥・実成院の部屋
駕籠の中へ入る実成院――介添えをす
る藤野。
実成院「とうとう、大奥ともお別れか」
藤野「左様でございますな……」

実成院「まいるかの」
藤野「はい」
と、瀧山がやってくる。
実成院「瀧山……」
瀧山「実成院様、どうかお元気で……」
実成院「そなたも、これまで大儀であったな」
瀧山「（藤野に）実成院様のこと、何卒よしなに」
藤野「はい」
と、駕籠を閉める――女中たちが駕籠を抱える。藤野を先頭に、実成院を乗せた駕籠が去っていく。深々と平伏して見送る瀧山。
瀧山「次は、静寛院様じゃな……（と立ち上がる）」
○同・同・静寛院の部屋
駕籠の支度がされ、藤子に介添えされながら、静寛院が中に入ろうとする。
が、やってきた瀧山に気が付くと、側

に駆け寄る。

静寛院「瀧山、ありがとう」

瀧山「静寛院様……」

静寛院「そなたのおかげで、戦を止めることができた」

瀧山「何を仰せられまする。朝廷と交渉ができたのは、静寛院様が帝の妹君であられたからこそでございます。（と藤子に）土御門殿にも京まで上洛いただいて……。静寛院様お輿入れの際、公家の者たちを蔑ろにしたことが情けなく思います」

藤子「いえ……。私はただ、宮さんのためにしたまでのことでごじゃります」

静寛院「私は、家茂さんが好きやった。せやから、徳川の嫁として生きることができたんや。藤子も、ずっと私の側にいてくれて」

瀧山「将軍家も無くなります。これからは、どうかご自身のために、お幸せに暮らしてくださいませ」

静寛院「せやな……」

瀧山「……」

静寛院「（瀧山の手を取り）達者でな……」

瀧山「静寛院様も……」

静寛院、笑顔で頷くと、駕籠の中へ入っていく。藤子、駕籠を閉めると、瀧山に一礼する。

藤子を先頭に、静寛院を乗せた駕籠が去っていく――深々と平伏して見送る瀧山。

N「四月九日。静寛院と実成院は、御三卿の一つである清水家の屋敷に移り住んだ。実成院は、いくつかの屋敷を転々とした後、千駄ヶ谷邸へ転居。明治三十七年、八十四歳で亡くなるまでの二十七年間をここで過ごしたと言われている。静寛院は、明治二年に一旦は京へ戻ったものの、五年後には東京と改めた江戸へ再び戻った。そして明治十年、夫・家茂と同じ脚気衝心の発作で三十二歳の生涯を閉じたのである」

○同・同・廊下

瀧山が歩いている。

N「翌日、天璋院と本寿院が、大奥を去る日がやってきた」

○同・同・本寿院の部屋

駕籠の支度がされており、法好院の介添えを受けながら、本寿院が中に入る。

見送りに来ている瀧山。

本寿院「瀧山」

瀧山「はい」

本寿院「まさか大奥が無くなるなど、思うても見なかった。そなたは、筆頭御年寄として、大奥の最期を見届けるのじゃ」

瀧山「無論にございます」

本寿院「（涙を堪えて）最後間で、そなたは芯の強いおなごじゃな」

瀧山「……」

法好院「瀧山様、長い間、お世話になりました……」

瀧山「法好院様こそ、乳母として亡き家定公を幼き頃よりお育てになられ、今日に至るまで徳川に仕えていただきました。上臈御年寄として、本寿院様や家定公を影ながらお支えにもなって……」

法好院「これからも、本寿院様のことは私にお任せくださりませ」

瀧山「（大きく頷くと本寿院）本寿院様、天璋院様と嫁姑、くれぐれも仲良くなさいますように」

本寿院「（渋々と）分かっておる」

瀧山「お元気で……」

本寿院「そなたもな……」

法好院、ためらいながらも、駕籠を閉める。法好院を先頭に、本寿院を乗せた駕籠が去っていく――深々と平伏して見送る瀧山。

○同・同・天璋院の部屋

瀧山が入ってくる。

瀧山「（驚いて）これは……」

部屋中に天璋院の打掛や家財道具が丁寧に並べられている。と、そこへ、天璋院が入ってくる。

天璋院「瀧山か」

瀧山「天璋院様、これは……」

天璋院「城を明け渡すのじゃ。大奥で使っていたものは、全てここに残していこうと思うてな。それに、薩長軍がこの部屋を見たとき、大奥がいかに徳川の権威において要ともいえるところであったかを、見せつけてやりたいのじゃ」

瀧山「左様でございましたか」

天璋院「なあ……瀧山」

瀧山「……？」

天璋院「そなたとまた会える日は、来るであろうか。今日が、今生の別れになるような気がしてならぬ……」

瀧山「必ずまた、会える日が来ましょう」

天璋院「そうだと良いが……」

瀧山「天璋院様。私が、本日まで筆頭御年寄の職を全うできたのは、他の誰でもなく、天璋院様のおかげと思うております。このご恩は、決して一生忘れませぬ」

天璋院「瀧山……」

瀧山「私は、あなた様のお側でお仕えでき、こうして最後を見送ることができるのは、何よりの誉と思うております」

天璋院「……」

瀧山、深々と頭を下げると、

瀧山「誠に、ありがとう存じました……」

天璋院「……」

瀧山「どうかこれからも、徳川家をお守りくださいませ」

天璋院「言うに及ばずじゃ。私とて、まだやらねばならぬことは、たくさんあると思うておる。これからの徳川家は、私が守ってまいる」

瀧山「天璋院様……」

天璋院「そなたは、これからどうするのじ

や？」

瀧山「部屋子の仲野を養子に致し、仲野の故郷の伝手を頼ろうかと」

天璋院「そうか……新たな道を開いたのじゃな」

瀧山「はい……」

と、幾島が入ってくる。

幾島「天璋院様、お駕籠の支度が整いましてございます」

天璋院「すぐに参る」

瀧山「幾島殿、天璋院様のこと、何卒よしなに……」

幾島「心得ております」

瀧山、大きく頷く。

○同・平川門

幾島を先頭に、天璋院を乗せた駕籠が進んでいく。

天璋院の声「止めてくれぬか」

駕籠の列が止まる――幾島、駆け寄っ

て、駕籠を開けると、

幾島「天璋院様、如何なされました？」

天璋院「最後に、城を見ておきたくてな」

幾島「……」

天璋院と幾島、江戸城の外観を眺める

――二人の目には、涙が浮かんでいる。

天璋院「さらばじゃ……」

いつまでも城を眺めている天璋院。

N「四月十日。天璋院と本寿院は、御三卿の一つである一橋家の屋敷に移り住んだ。本寿院は、天璋院と実成院と共に、いくつかの屋敷を渡った後、明治十年、千駄ヶ谷邸に移り、明治十六年に七十九歳の生涯を閉じるまで、悠々自適な老後を過ごした。天璋院は、元号が明治となってから、徳川家十六代当主となった家達の養育に尽力し、徳川家を支えていった。そして明治十六年、千駄ヶ谷邸で四十九歳の波乱の生涯に幕を閉じたのであった」

○同・大奥・瀧山の部屋

宿下がりの支度をした梅原が、瀧山に挨拶をしている――側に控える染嶋と仲野。

梅原「本日まで瀧山様にお仕えできたこと、梅原生涯の誉と致します」

瀧山「よう仕えてくれた。これからは、呉服問屋を切り盛りしていくのじゃ。いずれそなたが女将になる日も来るであろう。商人としての新しい道を歩むのじゃ」

梅原「最後まで……大奥を見届けるまでお仕えできぬことが、何より悔しゅうございます」

染嶋「最後は、私どもに任せるのじゃ」

仲野「そうですよ、梅原殿」

梅原「……」

瀧山「そなたは、まだ若い。妻となり、母となり、これからおなごとしての幸せを感じるよう生きてほしい。そなたが幸せになってさえくれれば、私も安堵できる」

梅原「瀧山様……」

瀧山「そなたの人生、まだまだ長いであろう。私は、もはや過去の人になる。前を見て、これから来る新しい時代を生きてほしい」

梅原「瀧山様ッ……瀧山様……」

と、瀧山に抱き着いて、慟哭する。

瀧山「梅原……」

瀧山の目にも涙が浮かんでいる――染嶋と仲野も、もらい泣きをしている。

○同・同・長局

瀧山が染嶋と仲野を従えてやってくる――荷物一つなく、広々としている。

染嶋「長局が、このように静かになるなど、思いもかけませんでした」

瀧山「女中たちの住まいであったからの、この長局は」

仲野「このような様を見ると、大奥が無くなることを思い知らされますな……」

瀧山「そうじゃな……」

と、足音が聞こえる――振り返る一同。

御祐筆・竹川が、やってくる。

瀧山「竹川……」

竹川「お言いつけの通り、大奥日記全て、焼き払いましてございます」

瀧山「ご苦労であった」

竹川「誠、よろしかったのでございましょうか。大奥の記録全てを処分致すなど」

瀧山「大奥は無くなるのじゃ。大奥の故事をしたためたものなど、もはや残す必要もないであろう」

竹川「左様でございますな」

瀧山「竹川、そなたはこれからどうするのじゃ？」

竹川「長いこと、大奥で起こりしことを記録する御祐筆を務めておりました故、子どもたちが書を習えるところを拵えようかと」

瀧山「書の師範になると言うことか」

竹川「はい」

染嶋「それは良きお考えかと」

仲野「ぜひ習うてみたいものでございます」
竹川「（微笑むと）では、私もこれにて」
と、平伏すると去っていく――見送る
瀧山、染嶋、仲野。

○呉服問屋『富橋屋』・店
建右衛門、おあつ、五助、その他手代や女中たちが働いている――梅原が帰ってくる。
五助「（驚いて）お嬢さんッ……」
梅原「ただいま、帰りました……」
建右衛門「おうめ……」
おあつ「（駆け寄って抱きしめると」よく戻って来た……何事もなにか……）
梅原「城明け渡しとなって、私も御役御免になって……」
建右衛門「それで良いんだ。お前は、この富橋屋の跡取り娘なんだから。無事なら、何よりだ……」
梅原「お父っぁん……」

おあつ「さ、あんたも喜八さん手伝っておいでよ」
梅原「そういえば、喜八さんは？」
建右衛門「手伝いに行かしたんだよ。和泉屋さんの立て直しの」
梅原「和泉屋さんって、あの両替商の」
建右衛門「喜八に会いてえんだろ」
梅原「……五助、案内しておくれッ」
五助「へいッ、喜んで」
と、五助と共に飛び出していく梅原。
お互いの顔を見ながら微笑む建右衛門とおあつ。

○両替処『和泉屋』・店
壊れた道具を片づけている権太夫――
手伝っている喜八。
室内の修繕をしている正吉と長兵衛。
喜八「大旦那、大事ございませぬか」
権太夫「これぐらいの、大したことない」
と、険しい顔で腰を押さえる。

喜八「少し休まれては？」
権太夫「大丈夫じゃ」
と、五助と梅原が入ってくる――驚く
喜八。
喜八「お嬢さん……」
梅原「これからは、富橋屋の娘として生きて
いきます。喜八さん、私をずっと生涯かけ
て……支えてくれませんか。私と夫婦にな
ってください」
喜八「当たり前ですよ……。俺は、初めから
そのつもりで……」
梅原「喜八さん……」
強く抱き合う喜八と梅原――唖然と見
ている五助、権太夫、正吉、長兵衛。
と、そこへ、崩れた箪笥をおさと、鶴
岡、おはるが運んでくる。
おさと「（権太夫に）大旦那様、これはここ
に置いておきます……（と梅原と喜八を見
て）どういうことだい、これは……」
梅原と喜八、慌てて離れる。

梅原「お見苦しいところをお見せしました……」
鶴岡「梅原殿……？」
梅荒「鶴岡様ッ……」
おさと「（鶴岡に）おみねさん、お知り合いかい？」
梅原「梅原殿は、大奥筆頭御年寄の瀧山様にお仕えしていた部屋子だったのです」
梅原「どうして、鶴岡様がここへ……」
鶴岡「これからは、大工長兵衛の女房・おみねとして生きる道を選んだのです。娘のおはるも、こんなに大きくなって……」
梅原「夫と子がおいでになるとは聞いてはおりましたが、この人たちが……」
鶴岡「ええ」
梅原「帰る当てがあるというのは、この事だったのですね。鶴岡様も、お幸せそうで良うございました」
おはる「（鶴岡に）鶴岡って、おっかさんのこと？」

梅原「（おはるに）そうだよ。鶴岡様は、大奥で御客応答っていう役をされていたの」
長兵衛「その、御客応答っていうのは、どういうお役目なのです？」
梅原「諸大名のお使者や、大奥に泊まられる際の上様への接待役を担うております。瀧山様も、鶴岡様の才覚を買っておられました」
おさと「（鶴岡に）おみねさん、あんたそんな偉いお役職だったのかい」
鶴岡「御客応答鶴岡は、もうこの世にはいないのです。今の私は、おみねでございます」
梅原「鶴岡様……」
鶴岡「おみねとお呼びください」
梅原「おみねさん……」
鶴岡「梅原殿は、何とお呼びすれば？」
梅原「おうめと、呼んでいただければ」
鶴岡「では、おうめちゃん」
梅原「何だか、恥ずかしゅうございますね」
笑い合う鶴岡と梅原。

正吉「これぞ、新しい門出って奴だな」
権太夫「同じ大奥に勤めていた者同士が、うちの立て直しの中で会えたのも、何かの縁というものじゃな」
正吉「よし、日が暮れるまで、もうひと踏ん張りやるか」
おさと「はいよ、お前さん」
鶴岡「（梅原に）おうめちゃん、手伝って」
梅原「はい、おみねさん」
と、おさと、おはると共に奥へ行く梅原と鶴岡――その様子を微笑ましく見ている権太夫、喜八、五助。

○江戸城・大奥・瀧山の部屋
瀧山が茶を飲みながら夜空を眺めている――と、染嶋がやってくる。
染嶋「最後の夜にございますな」
瀧山「そうじゃな……」
染嶋「大奥最後の夜……そのような日が来るなど、思うてもおりませんでした」

瀧山「染嶋……」
染嶋「はい？」
瀧山「せめて今晩だけでも、叔母上と呼んでもよろしゅうございましょうか」
染嶋「（笑って）ならば私も、姪のおたきと呼べば良いか」
瀧山「はい……」
染嶋「おたき、そなたは私にとって、自慢の姪子じゃ。この情勢の中、よくぞこの大奥を守り抜いた。そなたが筆頭御年寄でなければ、どうなっていたか……。私は、そなたを誇りに思う」
瀧山「叔母上……。私のお側に、ずっと仕え、見守って頂いたからこそ、筆頭御年寄が全うできたのでございます。叔母上だけではございませぬ。亡き村瀬、そして仲野や梅原。お付きの中臈や部屋子を始め、天璋院様や静寛院様、この大奥のおなごたちがいたからこそ、今の私がいるのです」
染嶋「そうじゃな……」

と、仲野とませがやってくる。

ませ「こちらにおいででしたか」

仲野「お二人で何を話されていたのです？」

瀧山「（ませに）ませ……そういえば、天璋院様の一行の中に、そなたいなかったな」

ませ「天璋院様からのご命を受けたのです。大奥最後の日は、叔母である瀧山の側にいるようにと」

瀧山「天璋院様らしい、お心遣いじゃな」

染嶋「では、そなたは明日、天璋院様の元に戻るのか」

ませ「はい」

瀧山「姪であるそなたが、天璋院様のお側にいてくれるのは、何より心強い」

ませ「天璋院様のことは、このませにお任せください、叔母上」

染嶋「初めてかもしれぬの、この三代の親類が揃うのは」

瀧山「左様にございますな。（と仲野を見て）それに、養子となった娘もおります故」

仲野「私は、瀧山様を何とお呼びすればよろしいのでしょうか」
染嶋「母上……で良いのではないか？」
瀧山「そうじゃな……。母上で良い」
仲野「母上様……」
瀧山「慣れるまで時間がかかるやもしれぬ」
染嶋「いや、すぐに慣れるであろう」
笑い合う瀧山、染嶋、仲野、ませ。
N「この日が、大奥にとって最後の夜となった。そして、翌、三月十一日。城を明け渡す日がやってきた」

○同・同・御鈴廊下（翌）
瀧山を先頭に、染嶋と仲野が後ろに控えて歩いている。御錠口の前まで来ると、瀧山自ら、錠を開ける。両側から襖を開ける染嶋と仲野。
中奥へ足を踏み入れる瀧山、染嶋、仲野――瀧山、振り返り、廊下からの景色を眺める。

瀧山「さらばじゃ、大奥……」

と、襖を閉める。

○同・同・廊下

薩長軍が入ってきて、次々に襖を開けていく。

N「瀧山たちが大奥を去った後、入れ替わるように、薩長軍が江戸城入りを果たした」

○同・同・天璋院の部屋

海江田、その他薩長軍が来ると、襖を開ける——鮮やかに飾られている打掛や家財道具を見て、呆然となる。

○墓地

村瀬の墓参りに来ており、手を合わせる瀧山、染嶋、仲野。

瀧山「村瀬。そなたが生きていたら、どうなっていたであろうか……。そなたのことは忘れぬ。安らかに、ゆっくり休むのじゃ」

と、出家した富十郎がやってくる――

富十郎、瀧山に気づくと、一礼する。

瀧山「そなた。もしや、市村富十郎殿か……」

富十郎「はい。今は剃髪いたしまして、妙斎と名乗りまする」

瀧山「左様か……」

富十郎「瀧山様。私に生きるようにと、ご赦免頂きましたこと、決して忘れませぬ。助けて頂いたこの命、村瀬様とお腹の子の分まで、生きようと思います……」

瀧山「私たちは、本日をもって江戸を立つ。村瀬のこと、頼みます」

富十郎「はい……」

去っていく瀧山、染嶋、仲野――深々と頭を下げて見送る富十郎。

○旅の道中

瀧山、染嶋、仲野が歩いている。

瀧山「川口宿まで、まだ大分あるの」

仲野「旅の道は、まだ長うございますよ、母

上様」
染嶋「この婆の命が持つかの」
瀧山「叔母上、何を仰います」
仲野「川口宿に着きましたら、しばらくゆっくりお休みください。今日に至るまで、大奥のために尽くしてこられたのですから」
瀧山「（微笑んで）そうじゃな」
染嶋「休むことも、お役目の一つであることを忘れておった。なあ、おたき」
瀧山「はい」
仲野「この先に、茶屋があります。そこで少し、骨休み致しましょう」
瀧山「そうじゃの、おきぬ」
仲野「え……？」
瀧山「そなたの元の名であろう。叔母上はおけい、私はおたき、そなたはおきぬ。これからは、その名で新しく生きることに致しましょう」
染嶋「そうじゃな」
仲野「はいッ……」

笑顔で頷く瀧山――いつまでも歩いていく瀧山、染嶋、仲野。

N「こうして、江戸幕府二百六十年の歴史は幕を閉じたのである。大奥最後の筆頭御年寄であった瀧山は、部屋子の仲野を養子とし、仲野の生家がある現在の埼玉県川口市で、その余生を過ごしたと言われている。仲野が後に婿養子を迎えたことで、瀧山の名字を名乗らせ、瀧山家という新たな家を作ったのである。そして、叔母の染嶋が亡くなった僅か一年後の明治九年、瀧山は後を追うように七十一歳の生涯を終えた。人生を徳川に捧げ、千人とも言われる大奥の頭に君臨した瀧山の人生は、決して平坦なものではなかったが、大奥の最期を見届けた瀧山は、まさに大奥の鑑であり、その功績は、後の時代にも語り継がれているのである」

完